

悪い子まみみと良い子りょうすけ

天邪じゃく

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

悪戯と人をからかうことが大好きな『悪い子』が283プロの仲間たちと共に『W・I・N・G』優勝を目指す——『彼氏持ちの悪い子アイドル』として。

# 目次

283プロ所属前編	
悪い子と幼馴染み	1
悪い子と朝食	9
悪い子とクラスメイト	14
悪い子とデート	23
悪い子と告白	36
283プロ交流編	
悪い子と後輩	49
悪い子とヒーロー	58
悪い子とインドアな姉	69
悪い子とリリースイベント	77
トリツキーナイト	88
W・I・N・G 編―シーズン1	
悪い子とバックダンサー	98

## 283プロ所属前編

### 悪い子と幼馴染み

「どうもすみません、ありがとうございます」

そう言つて最早顔馴染みとなつてしまつた警察官二人組にお礼を述べる。

時刻は夕暮れ時を越え、煌びやかなネオンライトが夜の街を照らす。

教えてもらつた場所を目指して、それなりに人が行き交う道を一人走りながら目的の人物を探し回る。

結構な時間、走り回つていたため汗だくになつてしまつたが関係ない。

「ふう、毎回うろつく場所が変わるときすがに手間が掛かるな……」  
パトロール中の警察官に、今自分が探している人物の所在地を聞いた結果、今回は自動販売機の横でしゃがみながら缶ジュースを飲んでいるらしい。

人通りもそこそこあるため、注意深く見ていなければおそらく気付かないだろう。

毎回探す身としては、日に日にうろつく所が見つけにくくなつていく。

正直、警察の人と仲良くなつていなければ最後まで見つけることも出来なかつたかも知れない。

勿論、それを自称『悪い子』を公言しているあの子は意図的に行つているのだろうか……

「(えっと、ここを右に曲がつて……あつた！ あの白色の自動販売機だな)」

目的の目印となる自動販売機を発見すると、その横にはしゃがみ込んで道行く人をぼんやりと眺めながら缶ジュースを飲んでいる幼馴染み——田中摩美々の姿があつた。

スクールシャツを少し着崩し、緑色のジャージをだらしなく羽織

る。首には黒いチョーカーを付け、両脚にカラフルなニーソックスを履いている、パンキツシユな格好。

摩美々は自分を見つけると、それまでのアンニュイな表情を一転させ、いつもの悪戯っ子の顔になる。そして小悪魔のような笑みを浮かべながらこちらを見つめてくる。

「ふふー、今日はあ、随分と遅かったですねー」

可愛くも小馬鹿にしたようないつもの物言い。その容姿と格好も相まって不快感はあまり感じない。……もしくは、幼馴染みとして言われ慣れていると言うことかも。

「そう思うなら、もつと見つけやすい場所に居てくれないか？」

「えー……でもお、それだとツマらないんですケドー」

「いや、そう言う問題じゃなくてだな……そもそも夜遅い時間に女子高生がこんな所をうろつくなど言ってるんだ。何かあつてからじゃ遅いんだから」

摩美々が夜に出没する場所は、そこそこ人通りもあり巡回する警察官も存在するため、ある程度は安全と言えるかもしれないが、危険な目に遭う可能性が0と言うわけではない。

また、そのパンキツシユな見た目が注目されがちだが、顔立ちやスタイルも悪くない。

むしろ人気アイドルと並ぶぐらいの美少女と言っても過言ではないと思う。まあ少し身内びいきも入っているが。

「それを言うならあ、良介も私と同じ高校生でしょー？」

「同じ高校生でも男と女じゃ危険度が全然違うってこと。まして摩美々の容姿なら尚更だ」

「……ふふー、それってまみみが可愛いからあ、心配してるってことー？」

「うぐつ……い、いいから馬鹿なこと言つてないで早く帰るぞ」  
『可愛いから』なんてそんなもの、好きな子なら当然可愛いに決まっている。

……実際には口が裂けてもそんな言葉は言えない、仮に『可愛い』なんて摩美々に言ったらからかわれるのが関の山だろうな。

恥ずかしがる自分に対して『ふふー』と満足そうに笑みを浮かべると、摩美々は今まで飲んでいたジュースをこちらに手渡ししてくる。

「まみみのこと探してくれたお礼に、それあげるー」

「……二回目は騙されんぞ。前にも同じようなこととしてきて中身は空だった——ん？」

手渡された缶ジュースは中身が半分ぐらいある重さだった。と言うことは……

「本当に入ってたのか……」

「私のこと探し回ってノド渴いてると思ってー。汗もかいてるしー」

だったらお前の飲みかけじゃなくて新しいのを買ってくれよ……そのまま俺が飲んだら間接キスになるだろう。

多分摩美々のことだから俺の反応を見て楽しむ気だな、その手には乗らんぞ!!

「……あの、やっぱり私が口つけた物なんて飲みたくないよねー……」

この状況にどう対応しようか難しい顔で考えていたところに、急にしおらしくなった幼馴染みが遠慮がちに問いかけてくる。

あれ?なんか反省してる時の表情と似てるし、純粹に俺のことを考えて渡してくれたのかな?

「ごめんなさい。嫌なら——」

「違う、違う! 嫌じゃないんだけど……ほら、このまま飲むと俺はいいとしても摩美々が嫌かなと思ってだな」

「なにがー? 私は別に気にしないケドー」

それって単純に異性として見られていないってことか……。「やっぱり飲みたくないー?」

摩美々も気にしてないみたいだし、実際に喉渴いているのは本当だしな。

まあ、ありがたく頂くか……間接キスとかそう言う邪な考えはないぞ?」

「ん……」

貰った缶ジュースに口をつけると、いろんな果物が混ざったような味。

恐らくはフルーツミックスジュースだろうか？

「ふふー……」

飲み物で喉を潤していると、不敵な笑みと共にこちらに近づいてきた摩美々が耳元でボソボソつと言葉を発した。

「まみみと間接キス、しちやいましたねー」

「ぶっ！…ごほっ……ごほっ!!」

気にしてないと思っていた人物から放たれた発言に、思わずジュースを吹き出しそうになるが寸前のところで押しとどめる。その結果、喉に詰まってむせてしまう。

「良介大丈夫ー？ 優しいまみみが背中をさすってあげますよー」

優しいならこんな（俺の）心臓に悪い悪戯をするんじゃない！

楽しそうに背中をさす姿を見てようやくからかわれたことに気が付く。

と言うか一体何年こいつの幼馴染みをやっているんだ俺は……また引つ掛かったんだが。

「お前なあ……」

喉が落ち着いてきたので文句の一つでも言ったあと叱ってやろうと思いい言葉を続けようとすると、不意に摩美々が自分の右手を握ってくる。

「ほらあ、早く帰りませよー」

「……手を握ることで、全部うやむやにしようとしてもそうはいかないからな」

「えー……、また良介のお説教聞かなきゃいけないのー？」

お説教と聞くと普通ならマイナスイメージしか思い浮かばない言葉だが、摩美々にとっては少し違う。

悪戯をしたり困らせたり、からかったりする（全部ほぼ俺限定）のも叱られるのを目的としてやっている節がある。

実際、今もいつものようにくどくど注意しているのだが、当の本人は楽しそうに聞いているところを見ると効果があるのかどうか……。

今まで本当に危ないことは起きていないから少しは聞いてくれていると思う。多分。

「そういえばあ、良介に訊きたいことがあるんだけどー」

「ん、なんだ？」

「……良介は、どうしてそこまでしてくれるのー？ どこにいるかもわからない私のために、汗だくになって必死に探してくれたりー、私のこと、心配してくれたりするケド……」

「それは……」

「昔、私の両親に頼まれたからあ？」

「それも理由の一つではあるけど、俺が摩美々のためにここまでする理由なんて――」

「(田中摩美々が好きだからに、決まってるだろ)」

正直にこの言葉を言いたいが言えない。言ったら恐らく今の心地良い関係が崩れてしまうから。

あと俺自身が告白する勇気が出ないへタレって言うのもあるけど……

「良介？」

「摩美々のご家族に頼まれたから――それも理由の一つだけど……そう、だな、やっぱり大事な幼馴染みだから、ここまで心配するし叱つたりもするよ」

『好き』とストレートに伝えることは出来ない。かと言って興味が無いような言い方もしたくない。

今自分に出来る精一杯の『好き』の伝え方はこれが限度か……なんか情けないな。

「ふーん、それじゃあ、まみみがこういうことしてる限りは、良介を独占できるってことですねー」

「独占って……まあ、あながち間違いいはないけれども」

「ふふー、よかったですねー。まみみのイタズラを独り占め出来るなんて、良介の幸せ者ー」

捉え方を変えれば俺も摩美々を独占できてるってことになるから、まあ幸せ者ではあるのかな？



ただ、本人に『幸せ者です』なんて正直に伝えることは、からかうエサを与えるようなものだからな。

「はいはい、可愛い幼馴染みを独占できる自分は世界一の幸せ者ですよー」

だから、本心を少し皮肉っぽい言い方で伝えた。

その言葉を聞いた摩美々は『ふふー』と笑って繋いだ手を強く握ってくる。

この日も心の中でいつもと同じ心地良さを感じながら、二人で帰路につく。

二人で一緒に帰ったり、過ごしたりすることで毎回強く実感する。

——やっぱり自分は、田中摩美々が大好きなんだな、と。

\*\*\*\*\*

「……ふふー」

良介と共に帰宅した後、お風呂から上がりパジャマに着替えた摩美々はベッドに寝転がりながらスマホをいじっていた。

顔をほころばせながらトークアプリのLIMEを眺める。

内容は明日、摩美々の両親が仕事の都合上、朝早く家を出てしまうため朝食を良介の家で食べることになるというもの。

これに対し良介は『なにかリクエストは？』等を訊いてくれ、家にある食材で摩美々の食べたい物を作ろうとしてくれている。

リクエストに『チョコレートパフェ』と答えたら、怒ったカメレオンのスタンプが返ってきた。

正直、良介が作るならどれも美味しいのでなんでも構わない摩美々。むしろ——

「(良介と朝ごはん、久しぶりー)」

大好きな幼馴染みと一緒に食事できることの方が重要である。

「(……そういえば、今日私のジュース飲んだ時、少し顔赤くなつたケド、意識とかされてるのかなあ……)」

ふと、少し前に自分を見つけてくれた時に仕掛けたイタズラのことを思い出す。

もしそうなら嬉しいが、実際のところは本人しかわからない。

「(恥ずかしかつただけかも。まあ、良介は私と違って良い子ですからねー)」

悪戯をしたり、からかつたりする摩美々とは反対に、良介は品行方正な優等生タイプかつ人当たりも良いため周囲の評価も高い。

実際に男子クラス委員長もやっている。ついでに眼鏡も掛けている。

本人曰く『普通にしていたら誰でもそれなりに良い子に見える』らしい。

砕けた喋り方をするのは摩美々や一部の仲のいい友人のみ。

ただそれ以上に、摩美々にとつて一番の問題は女子人気も高いと言うところ。

性格、容姿共に一般的な高校生と比べ少し老けているのだが女友達曰く、ここがポイントらしい。

老けていると言っても良い意味で、性格はより大人っぽく、容姿も18歳にして学生と言うよりも成人男性に近い顔つき。

容姿端麗な同年代の若い子をイケメンと評するなら、良介は大人びたカッコよさと言えるだろう。

「(でも、まみみが『悪い子』でいる限りは——)」

——良介はまみみのモノ、つてことですよねー。

こんなやり方で大好きな幼馴染みを縛るのは卑怯かもしれない。

いつそ告白をして気持ちを伝えられればどんなに楽か。

実際に何度か『好き』と言う気持ちを伝えようとしたが、最終的に自分から『ウソですよー』などの、いつも通りのからかいの言葉では

ぐらかしてしまおう。

『『大事な幼馴染み』なんだし、普通の人よりは意識してくれてるよねー、きつと……』

自分に言い聞かせるように呟くと同時にLIMEのメッセージ通知音が鳴る。

『明日寝坊はするなよ』

「ふふー、ふふふー」

そのシンプルなメッセージを見て楽しそうに笑った摩美々は、いつものようにこう返信した。

『どうですかねー、まみみ悪い子なんでー』

## 悪い子と朝食

『……………in…t ion』

「……………ん」

携帯の大きなアラーム音で、ぼんやりとした意識が少しずつ覚醒していく。

……そうだ、今日は摩美々がこつちで一緒に朝食を取るから、いつもより早めにセットしたっけ……………。

特別朝が弱いわけではないが、普段より早めに起きようとするとも眠気も段違いだな。

そんなことを考えつつ、ベッドから体を動かそうとして違和感に気付く。

何かが自分の上に乗るかかっているような重さを感じる……………。  
「……………」

盛り上がっている掛け布団は、誰かが俺のベッドに潜り込んでいる  
明らかな証拠。

いや、まあ犯人は一人しかいないのだけれども。と言うかあの子、  
いつスペアキーを返してくれるんだ？

問題の人物を叱る前に、まずは心を落ち着かせる。  
正直、昨日の間接キス以上にタチの悪いイタズラだろう。健全な男

子高校生にはきつい。  
ちなみにきつい理由は言わずもがな、いろいろと当たっているか

ら。  
「ふふー、おはよーございまあす」

一気に掛け布団をめくり上げると、そこには居たのは制服姿に着替  
えた幼馴染み。

ドツキリが成功した仕掛け人のような笑みを浮かべ挨拶をする。  
まったく、この子は……………

「なるほど、摩美々は朝からお小言を聞きたいわけか」  
「えー、可愛いまみみにこんな起こされ方されたらあ、フツー喜ぶと思

うんだケド」

本当は嬉しいけど、そのまま伝えるわけにはいかないな。

「喜ぶかどうかはまた別の話。とにかく、早くどきなさい」

「ふわあ〜、なんだか眠くなってきましたー」

わざとらしいあくびと共に、全身をすり寄せてくる摩美々。

と言うか本当にやめてくれ！理性を保つにも限度があるんだから

！

「こ、こらっ！ いい加減にしなさい！」

女子高生特有の説明出来ない程のいい匂いと、出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる整ったスタイル。

そんな凶器を押し付けられながらも邪念を払う。

ついでに自分の体に抱きついていた摩美々のことも振り払う。

振り払われ再びベッドに舞い戻る幼馴染み。

そのまま仰向けに寝転がると未だに音が鳴っている自分の携帯をぼーっと凝視している。

アラームを止めようとスマホに手を伸ばすと同時に、今流れているアラーム音が設定しているものと違うことに気付く。

いつもは機械的な電子音が鳴り響く簡素なものだったはずだが、今流れているのは歌。

「（確か曲名は……ヒカリの destinationだったな）」

再びサビの部分がループする前に音楽を止める。

自分のスマホにこの歌を入れた記憶もないし、この歌で目覚ましをセットした覚えもない。

基本的に毎日同じ時間に設定してあるので、そもそもいじらない。とくればこんなことをする人間の候補で思い浮かぶのは、ただ一人。

今回に至っては摩美々ではなく、クラスメイトのアイドルオタクの  
作業。

「……良介って、アイドルとか興味あったっけー？」

「言っておくが、俺が設定したんじゃないぞ」

その言葉を聞くとベッドの上で『うーん？』と気だるげな表情で思

案する。

「あー……………、三峰ー？」

「正解。とりあえず着替えるから、下のリビングで待っていてくれ」

「ふふー、まみみはこのままでも大丈夫なんでー」

「でていきなさい」

少し強めの口調で言うとそのまま強制的に摩美々を部屋の外へと追い出す。

ベッドに潜り込まれる悪戯は何度か経験しているが未だに慣れない。

「はあ……………、朝から寿命が減るような悪戯は勘弁してくれ……………」

\*\*\*

「ほら摩美々、用意できたぞ」

二人分の朝食を作り終え、出来上がった物をダイニングテーブルに並べる。

今日のメニューは焼き鮭とだし巻き卵、そして味噌汁にご飯の和食テイスト。

ソファでスマホをいじりながら猫のようにごろごろしていた摩美々は『んー……………』と気だるい返事と共に起き上がると、こちらまで来てイスに座る。

「フツの朝食ですなー」

「なに面白さを期待しているんだ、お前は……………」

摩美々らしい感想が一言漏れる。

お互いに『いただきます』と口にしてから、料理を口に運んでいく。  
「うーん……………」

だし巻き卵を一切れ食べると、自分の髪をいじりながら何か考え込む幼馴染み。

「どうした？ 味付けが悪かったか？」

「悪くはないケド……よく失敗しないなあと思って。私もフツーに料理するだけなんだケド、いつも上手くないんだよねー」

「レシピ通りにやればそうそう失敗はしないよ。摩美々の場合、フイーリングで料理することをやめればいいと思うけど……」

「えー、感覚って大事じゃない？ ファッションもそうだしー」

「まあファッションについて、摩美々の右に出る者がそうそういないことは認めるけど、料理に関して、その感覚は役に立たないだろう？」  
摩美々のファッションセンスは、同じ着こなしが上手な人と比較しても相手にならないくらい群を抜いてすごい。

ただそのセンスが料理に方向転換された場合、至高の一品になる確率はごくごく稀。

要は普通に手順通り作った方が上手いくと言うこと。

「たまりにスゴくおいしい物も出来るしー、失敗しても良介が喜んで食べてくれるから問題ありませんー」

幼馴染みの失敗料理は絶対に食べられないと言うほどの物ではないのだが、普通に作った場合と比べ、やはり不味い。

その不味さ加減も絶妙で、頑張れば完食できるレベル。

何回か食べた後、もしかして悪戯なんじゃないか？と思うくらいだった。

「喜んで食べていません。食材を無駄にしたくないだけです」

「マジメですねー」

そもそも君が真面目に料理を作ってくれば全て丸く収まるのだが、わかつているのかな？

「それよりー、なんでさつきから味噌汁に手を付けないのー？」

「どこかの誰かさんが、人の味噌汁に塩を入れていたからだ」

「えー、まみみのこと疑ってるー？」

『ふふー』と笑っている時点で、自分が犯人ですって言ってるようなものだろ……。

大体、味噌汁が出来た時だけキッチンまで来て『運ぶの手伝いますよー』なんて明らかにおかしい。幼馴染みを甘く見るなよ、摩美々！  
「もし自分に味噌汁を飲んでほしかったら、まだ手を付けていない摩

美々々と交換だ。ただし交換した場合、最後まで責任をもって飲むだぞ」

「ふふー、わかりましたあ。それでいいですよー」

なんだ？やけに素直だけど……観念したのか？

まあ、たまには自分のやった悪戯で反省してもらうのも、いい薬になるだろう。

そう思っつて、自分と摩美々の味噌汁を交換する。

「まったく……これに懲りたら少しは反省を——ぶふっ！」

しっ、しよっぱい！どうして俺の味噌汁が?!

「最後まで、責任をもって、飲むんですよー」

目の前には、引っ掛かった人間を馬鹿にする小悪魔が居た。

いや、そもそもどうして俺の方に塩が入っているんだ?!

これじゃ何も言わない場合、悪戯した味噌汁は摩美々自身が飲むことに——

「良介ならあ、きつと交換してくれると思っつてましたよー」

にやにやしなながら、そんなことを言われてようやく気付く。

摩美々はわざと分かり易く悪戯して、この状況を作り出したのだと。

味噌汁に悪戯されたと確定した自分は、それを必ず俺のところへ置くだろうと言う答えを出してしまう……それを逆手に取ったのか！

仮にもし交換しなかったとしても、飲まなければいいだけだ。俺になにを言われようが、摩美々ならあの手この手でひらりと回避し、結局は飲まずに終えるからノーダメージ。

「ぐっ……………」

「どうしたんですかあ？ 良介も飲みましようよー」

その後、終始、俺を見ながらご機嫌で食事をする摩美々。

テンションが上がっていると思われる幼馴染みとは裏腹に、疲れがたまる朝のスタートを切ることになるのであった。



## 悪い子とクラスメイト

「うっ、口の中がまだしょっぱいな……」

「ふふー、大丈夫ですかあ?」

悪戯の余韻がなかなか引かず口の中でくすぶりながら、学校の廊下を歩く。

ちなみに自分に悪戯を仕掛けた張本人は高校に到着するまで、ごく楽しそうに朝食の出来事をからかいのネタにしてきた。

幼馴染みを甘く見ていたのはどっちなのか、改めて再認識させられるな……。

自分たちのクラスの前まで来ると、引き戸に手を掛ける。

戸を開け、教室の中に入ると――

「ぐっどもーにん! 良——ぐげえ!」

クラスメイトの男友達が挨拶と共に抱き着こうとしてきたので、軽く右に動く。

丁度摩美々が戸を閉めたタイミングで、そのままの勢いを維持したまま激突する。

「おはよう、三峰」

「相変わらず朝からテンション高いねー」

とりあえず無事であろう友達に挨拶をして、自分の席へと向かう。

ちなみに自分と摩美々、今の三峰ともう一人仲のいい女友達の計四人。

この四人が、窓際の席で固まっている。

「あ、摩美々に良介、おっはよく。てか、さっきの音ヤバくない? 三

峰、死んでる系?!」

「おはよー」

「おはよう、和泉。三峰は残念ながら生きてる」

「残念ってどういうこと?! 良介、ヒドくないっ?!」

既に着席していた黒ギャル系の女友達——和泉愛依。

首元がVネックの、スキップパー系のワイシャツの上に紺色のスクールベスト。

特徴的なのはその褐色肌と、Vネックから覗かせる大きな胸。

楽天的で大雑把、更にはノリもよく親しみやすいため仲の良い友達も多い。

俗に言う『ギャル』ではあるが、根は真面目でやるべきことはきちんとこなす。

もう一人、先ほど戸に激突したのはアイドルオタクの三峰真幸。

アイドルのことに関しては、他を寄せ付けない領域にいますと言っても過言ではない。具体的には同じアイドル好きが引くぐらい、一人一人のアイドルに対して知識のすごさが半端ない。

それと無駄に男前で、とあるプロダクションにスカウトされるくらいのイケメンでもある。

もつとも本人は『野郎のアイドルちゃんなんて興味ねえ!!』と言いきっぱり断った。

その度を超えたアイドル愛とお調子者な性格を知っている和泉や他の女生徒いわく、残念なイケメンと言う奴らしい。

「酷いのはお前だ。人の携帯を勝手にいじって、アイドルの曲を入れた挙句それをアラームにしただろう?」

「ぐふふ♪ アレを聴いてくれたか良介! どうだ、気持ち良く目覚め、素晴らしい朝を迎えることができたろ?!」

「まあ……ある意味、素晴らしかったよ」

「ふふー」

となりの席で笑っている悪い子のせいだな。

「そっか、そっか! 良介も順調にアイドル道<sup>ウエイ</sup>を突き進んでるようで安心したぜ!」

背中をバンバンと叩きながら嬉しそうに納得する三峰。

そもそもアイドル道とやらを走っているつもりはないのだが、このアイドルオタクのおかげで普通以上に詳しくなってしまったのも事実。

「なになに、ゲーノー人の話?」

「芸能人ではないっ、アイドルちゃんだ!」

「どっちも同じだと思っケド」

「いや、それよりもまず反省して欲しいんだが……」

摩美々と和泉に芸能人とアイドルちゃんの違いとやらを説く暇があるなら、人に迷惑かけたことを謝罪しろ、三峰。一々アラム設定し直すのも面倒なんだぞ？

「そうだ！ 次のアラムはどんな感じの曲にするんだ？ なんなら今回みたくまだ出回ってないレア物の奴でもオツケーだぞ？」

「お前、悪いと思っただろう？」

悪戯はとなりの幼馴染みだけでお腹一杯なんだよ……。

大体レア物って、あの曲まだ出回ってなかったりするの？

「あの曲ってまだ発売されてないのー？ この前、三峰が見せてくれたPVで使われてなかったー？」

「PVに使われてたのは1番で、あれはプロダクション紹介も含めた物だから『ヒカリのdestination』を歌ってる三人のPR音声も入ってる。今回、良介のアラムに設定したのは歌だけの奴で、まだ配信されてないんだぜー！」

「と言うことは、業界関係者辺りに頼んで手に入れたのか」

「マジ!? ゲーノ界に知り合いでもいんの、三峰?!」

公開前の情報から未発表のもの、まだ発売していない音源の入手などを考えると、アイドル業界に関係者が居るとしか思えない。

ちなみに業界人として自分が知っているのは、三峰が『同志A』と呼ぶ存在くらい。

本名は聞いていないし、実際に会ったこともないけれど。

「まあな！ それよか283プロは今後注目すべき事務所の一つだぜ。『W. I. N. G.』で台風の目になること間違いなしだ！」

Wonder Idol Nova Grandprix——通称『W. I. N. G.』

新人アイドルの祭典とも言われるこのライブは、出場資格を入手することも容易ではないらしい。

その分、出場できたアイドルはみな例外なく人気アイドル、もしくはそれに近い者として活躍していると言う事実が存在する。

283プロダクションと言えば、最近できたばかりの小規模な芸能

事務所だったな。

アイドルに関しては、まだベールに包まれているため分からないが、ユニット名は三峰が入手した情報で判明している。

朝の目覚ましで流れた『ヒカリのdestination』を歌っている三人組はイルミネーションスターズ。あとは五人組ユニットの放課後クライマックスガールズ。

他にアルストロメリアとアンティーカーと言うユニット名が存在するが、三峰いわくまだ人数が揃っていないらしい。

「てことで良介、今日は『W. I. N. G.』について勉強しようぜ」  
「……………それなら情報をわかり易く整理してもらってもいいか？ 出来れば重要な部分を五分でまとめて三峰の携帯で見せてくれると助かる」

「なかなか厳しい注文だが……任せろ!!」

頼もしさを感じる表情でそう言うのと、真剣な眼差しでスマホ画面を見ながら情報を取捨選択している。

よし、これだけ集中していれば周りの雑音も聞こえないだろう。

「んでも、五分後って先生くるカンジっしょ？ スマホいじってんのはヤバくね?」

「少しは反省してもらわないと困る。和泉も助けなくていいからな?」

「ふふー、良介も悪い子ですねー」

心配する和泉とは反対に、俺の意図を理解している摩美々はこれから起こる出来事を想像して面白がっている。

自分たちの通っている高校は、大きな問題や犯罪行為を起こさずにある程度ちゃんとしていれば、それ以外のことに関しては比較的緩い方。

なので携帯をいじるくらいであれば、特に問題はない。一応ルールとして携帯の持ち込み禁止とあるが、守られてはいない——と言うより、自分も守っていない。

もちろん学校側もそれを知っていて黙認している。

ただし、教職員の前で堂々といじったり、持っているところを見つ

かかってしまうと没収されてしまう。

要は持ち込むのもいいし、いじつても構わない。あとは見つからないよう、うまくやれと言うことらしい。

実際に今も、集中してスマホをいじっている三峰の他に、何人かの生徒がスマホで暇を潰していたり、友達と画面を見ながら会話をしている。お、みんな一斉にスマホをしまい始めた、そろそろ時間か。

そして教室のスピーカーから予鈴の音が流れると同時に、担任教員が姿を現す。

「よしっ、なんとか間に合ったぜ！ 見ろ良介！ これが『W. I. N. G.』における押さえておくべきポイント——」

「またお前かあ、三峰エー！ 没収して説教すんの面倒くせえんだから隠れてやれって言うてるだろうが!!」

「ハメやがったなあ、良介エー！」

\*\*\*\*\*

「チツ……あのハゲ教師め、こつちが下手に出てりやあいい気になりやがって」

午前中の授業が終了し、午後へと移行する前のお昼休み。

ジャンケンに負けた自分は、中庭の自動販売機まで飲み物を買いに来ていた。

ちなみに勝った三峰もなんか勝手に付いてきた。

「愚痴をこぼすくらいなら、最初からしまっておくべきだったな」

「オメーのせいじゃねーか！」

「因果応報だ。これに懲りたら人の携帯を勝手にいじるなよ」

納得していない様子のクラスメイトに忠告をしつつ、摩美々と和泉の飲み物を買う。

背後では三峰が『この恨みはウサミン星人の曲で……』とか『いや、ここは茜ちゃんか！』とか呟いている。お前の頭に反省の二文字はな

いのか……

友人の脳味噌の中身について考えながら教室に戻ろうとすると――

「待て待て待てって!! オレのドリンクは?!」

「なんだ、まだ買ってなかったのか?」

「田中と和泉のだけでオレは自腹っておかしくね?!」

「ジャンケンに負けた人が買いに行くっただけで、おごる必要はないぞ? 二人に関してはこの前、委員会の仕事を手伝ってくれたからそのお礼」

そう言つて摩美々と和泉から渡された百円玉を見せる。

三峰は『えっ、そうだったの?!』と発しながら困惑の表情でなにか考え込む。

「でっ、でもこれじゃあオレだけ仲間外れじゃん! イジメだぜー、イジメ!!」

……ジューズ一本でうるさい奴だな。

そもそもライブのチケットをタダで渡してくるような人間が、こんなに駄々をこねるっことは財布でも忘れたのか?

「わかった、わかった。おごってやるから早く選んでくれ」

百円玉を一枚、自動販売機に投入すると『良介だいちゅき』と気持ち悪いことを言いながら、朝と同じように抱き着こうとしてくるので回避する。

「ぐいっふっ 照れることないんだぜ、良――あ」

さすがに朝と同じく激突することはなかったが、手をつけた場所が悪かったな。

既にボタンを押してしまっていたので、取り出し口に飲み物が落ちてくる。

三峰に選ばれたのはあつたかくいおしるこであった。

おしるこを手にとった友人は泣きそうな顔で、こちらを見つめてくる。

まあ今は冬を越えて、気温も暖かい春先だからな……

「自業自得だ、さすがに二回目はおごらない」

\*\*\*\*\*

「愛依、その激辛唐辛子、もう使わないのー?」

「いや、面白そうだから買ったカンジなんだけど、ヤバすぎるっしょー!」

良介と三峰が中庭まで飲み物を買いに行っている間、教室の窓際で机をくっ付けた女子二人は先に食事を始めていた。

摩美々は良介が朝作ったお弁当、愛依はコンビニで購入した菓子パンとおにぎり。

ちなみに面白そうだから買った物はおにぎりのことで、激辛挑戦おにぎりと言う商品。

このおにぎりは激辛ウマウマ唐辛子が小袋で付属していて、普通に食べることも出来るが辛くすると更においしい。

ツイスタなどで、女子高生を中心に今話題となっている。

「うちは一振りで限界だわ。つか、一番おいしい食べ方が一振りっぽい。ツイスタでフォローしてるこの人とかすげー頑張ってたべてたしまジチョコちゃんリスペクトだわ」

そう言うと、摩美々にも見えるようにスマホを傾ける。そこには普段は甘い物が大好きな女子高生(HN||チョコ高生)が激辛おにぎりに挑戦する様子が投稿されていた。

すごく辛そうな感じが伝わってくるが、これでもまだ二振り目である。

「ふーん、じゃあ全部かけたらヤバいんだねー」

「それ良介マジ死んじやう系じゃね?」

「ふふー、まみみ悪い子なんでー」

その言葉と共に愛依から小袋を受け取る。一応『ほどほどにしときなね』と言われたが、摩美々は悪戯に手は抜かない。故に今回も徹底的に仕掛けを施す。

「(狙いは……からあげで、衣の中に分散させて入れよー)」

幸い良介のからあげは衣が少し切れているため、切れ目を拡げても不自然な感じにはならない。摩美々は悪魔のような箸使いで唐辛子が入るように、なおかつ不審に思われない程度に切れ目を拡げる。

そしてその開いた部分に激辛ウマウマ唐辛子を少しずつ入れていく。

切れている場所は三か所存在するため、全ての部分に均等になるように調整しながら慎重に行う。

「最高じゃーん」

会心の出来に思わず言葉が漏れる。

確かに一見するだけでは、悪戯をする前と比べても見分けがつかない。

「すげー……これ完全犯罪ってやつじゃね？」

「目撃者がいなければ、そうなっていたかも知れないな」

愛依の感心する声の背後で、怒っているのか低い声が響く。

見れば、飲み物を四つ持った良介が険しい目つきで摩美々のことを凝視していた。

「……ちっ」

悪戯対象に犯行の現場を捉えられた張本人は、舌打ちをすると同時にそっぽを向く。

「おつかえりく、って三峰どうしたん？」

「トイレに寄ってから戻るそうだ。頼んでた飲み物、机に置いておくぞ」

「って、百円もあるけど……良介のオゴリ？」

「この前、仕事を手伝ってくれたお返し。三峰は……まあついでだな」

「さっすが良介、めっちゃ優しいじゃん。このこの」

右肘で小突きながら感謝の気持ちを伝える愛依。

一方、摩美々は自分の机に置かれたあつたかくいおしるを一瞥すると、不満を投げ掛ける。

「まみみ、メロンソーダを注文したんですケドー」

「悪いがメロンソーダは売り切れでな。代わりに摩美々の好きそうな



物を買ってきたんだ」

「じゃあなんで良介の机にメロンソーダがあるんですかねー？」

「自分のメロンソーダを買ったら売り切れになった。残念だったな」

勿論それは嘘である。そもそも良介は紅茶を選び、メロンソーダも売り切れてはいない。

単純に朝と今のからあげの仕返しであることは、誰の目から見ても明らかである。

「……………」

「……………」

「いやー、ホント仲イイよねー、マブダチってカンジ？」

愛依の言葉には反応せず、どちらも無言で視線を交え、火花をバチバチと散らしている。

どうやらお互いに一步も引く気はない様子。

結局この膠着状態は、トイレから戻った一人の男が摩美々の仕込んだ激辛からあげをつまみ食いすることで、終局を迎えることに。

「田中アー！」

「三峰、それただの自爆っしょ？」

## 悪い子とデート

週末の日曜日——それは学生と社会人にとって日々の疲れを癒し、自分自身をリフレッシュさせる貴重な休日。

時刻は午前十時過ぎ、駅前に設置された円形ベンチに腰かけながら、周囲を観察するように眺める。

おしゃれな格好をした若者、どこかへ出かけるのか楽しそうに歩く親子、腕を組みながら甘い雰囲気振りまくカップル、休日出勤であろうビジネススーツ姿のサラリーマンなど多種多様。

勿論、自分のお目当ての人物は見つからなかった。

約束の時間はもう過ぎているのだけれども……

念のため携帯を確認するが連絡はなし。

まあ『悪い子』だから多少遅れるのは仕方ないか。

「ふうー」

「うひゃあー」

俯きながら携帯のチェックをしていた所、突然耳に息を吹きかけられる。

噂をすればなんとやらと言うもので、今の行為で待ち合わせの人物が来たことを確信した。

ただ、いきなりの出来事でおかしな声を上げてしまったため、周囲の視線が集中し少し恥ずかしい。

とりあえず時間に遅れた事と、今恥ずかしい思いをした分の文句を言おうとして後ろを振り返る。

「ふうー、いい反応ですねー」

そこにはクスクスと愉快に笑う摩美々が立っていた。

叱るために声を上げようとしたが、その奇抜なファッションを見て、言おうとされていた言葉が喉元辺りでとどまる。

服装全体のコーディネートはいつもと同じパンキッシュ系。

下はペンキペイント風デザインのデニムスカートと所々破けた網タイツ。上は黒色のハーフトップ、更に中央にチャックが付いた透明なキャミソールを着て、その上にジャケットをだらしなく羽織っている。

る。

履いている網タイツは所々破け、丸くあいた穴から素肌が見えている。

破けていると言ってもダサイ感じではなく、ファッションの一部として充分通用するレベル。もちろんそれを分かつて摩美々もそうしているのだろうか。

あと、黒のハーフトップ。

これは見方によつては下着にも見えるんだが、女の子はみんなこんな感じで着こなすんだらうか？キャミソールの肩紐をわざとずらしているのも相まって、なんだかいやらしい感じが半端ないな……。

今日の格好、今までの摩美々のファッションでも見たことがないほどの……トリッキーな格好、とでも言えばいいのだろうか？

正直、洋服のセンス等がない自分では、語彙力がないためこんな表現しかできない。

「……あの、そんなにじつと見られると恥ずかしいんですケド……」  
叱れると思いき身構えていた摩美々は、黙つて凝視されることで少し恥ずかしそうな表情を見せながら、自分の髪をいじっている。

「ああ、ごめん。なんて言ったらいいのかな……今日の摩美々の服装、結構気合い入ってるなと思ってさ」

「えー、そんなの当然でしょー。だって今日はデートですからねー」  
いつもの悪戯好きな表情に戻ると、デートの部分をわざと強調するように言う。

まあ確かに見様によつてはそうかもしれないが、実際は荷物持ちの意味合いが強い。

二人で出掛ける目的は、自分と摩美々の洋服選びのため。

昔、摩美々に『良介のセンスはよくないですからあ』と言われた通り、服装のコーディネートに関してには下手で、自分で組み合わせると他人にも『うーん……』と微妙な顔をされる。

それ以降、買う洋服や上下の組み合わせなどは、すべてこの幼馴染みからの助言を受けている。正直、言う通りにするだけで周囲の評価が180度変わった時は驚愕してしまった。

「ふーん……良介も似合ってるんじゃないですかあ？」

そんなことを考えていると、先程の自分と同じようにこちらを凝視していた摩美々が今日の服装に評価を下す。

今の服装は、ロング丈Tシャツの上にネイビー色の半袖スウェットを着て、モカベージュ色の長袖カットソーディガンを羽織っている。下は摩美々曰く、着回しやすさと万能性を兼ね備えているらしい黒のスキニーパンツ。

ちなみにこのファッションのポイントは色合いもそうだが、主にコーデイガンが優し気な雰囲気を出すため、親しみやすさを感じさせるらしい。

隣で『良い子にぴったりですねー』と言っているのは、この服装を選んだ張本人。

「摩美々のファッションセンスなら似合っていないわけないだろう？」

「さあ、どうですかねー」

褒められたこと自体は興味なしと言った様子で、携帯を確認する幼馴染み。

同じく腕時計で時間を確認すると十時半過ぎ。自分はそんなに時間をかける必要もないからいいとして、摩美々の時間は多めにとれるよう動かないとな。

「そろそろお店まで歩こう、午後はなるべくお前に時間を使いたいし」

「ふふー、まみみの彼氏は優しいですねー」

そう言っ腕を組んでくる悪い子。この前、朝起こしにきた悪戯に比べればまだ大丈夫なレベルだ。……胸は当たってるから、ドギマギするけれど。

「ところで時間に遅れた事と、さっきの悪戯について弁明はあるか？」  
内心の動揺を表情に出すことなく、平静さを意識しながら問いかける。

叱られると分かった本人はどことなく嬉しそうに言い訳を述べていく。

そんな摩美々の楽しそうな声と、腕に心地良いぬくもりを感じながら、最初の目的地であるお店へと歩を進める。とりあえず今日は楽し

いデートにしてあげないとな。

\*\*\*\*

駅前で摩美々と合流したあと、まずは自分の洋服選びのため予定していたメンズファッションブランドへと向かうことに。

午後の予定等も考えるところに時間をかけるつもりはなかったのだが、ファッションに関して妥協を許さない幼馴染みは納得がいくまで自分をコーディネートし続けた。

着せ替え人形になった気分でいろいろな服を試着し、解放されたのは午後二時過ぎ。

そのあと遅めの昼食をとり、次の目的のお店に足を運んだところ――

「やっぱり少し並ぶことになるか……」

そこは摩美々のお気に入りブランドのアクセサリーショップ。

服だけでなくピアスやネックレス、チョーカー等の、コーディネートを引き立たせる小物の類にも精通している幼馴染みと行列の中で順番待ちをしている。

お目当ての物は若いモデルがよく身に付けているレディースのネックレス。

大体の服に合う汎用性とシンプルな見た目でありながらアクセントの一つとして充分に機能するところが売りで、いま若い子を中心に口コミで人気が広まっているらしい。

「入荷直後の一時過ぎだったらあ、そんなに並ばなかったかもー」

本来の予定であれば午前中だけで自分の方を済まして、昼食後に向かえば一時過ぎに来れる計算ではあったのだが、真剣な表情で自分をコーディネートする摩美々を無視することもできず、結果的に二時間以上遅れることになってしまった。

個人的にこちらはとて面白い物を購入することができて大変満足

している。

ただ、そのせいでこの行列に並ぶことになった摩美々が退屈していないかが心配だな。

「良介、なにか考えごと〜?」

「ああ、結局並ぶことになってお前が暇していないかどうかをな。出来れば楽しませてやりたいし」

そう答えると、若干不機嫌な表情へと変化する摩美々。

やっぱり行列で待つてるだけなのは飽きるよな……。

「それじゃあ良介は、いま楽しくないってこと〜?」

「そんなことあるわけないだろ。ただ、摩美々がお昼をとっている間に自分がここへ来て並んでいれば、疲れることなく品物を手に入れることができたかなと思ってるさ」

自分の返答で更に機嫌が悪くなる。

呆れたようにため息を吐くと、こちらに向かって一言。

「良介って、ほんと女心がわかってないですね〜」

「フフ、それは私も同意見かな」

自分たちの会話に入ってきた聞き覚えのない声は、摩美々の言葉に賛同する。

背後から発せられた声に、二人で後ろを振り向くとそこには高身長で、モデルのように整ったスタイルを持つ女性が笑みを浮かべながらこちらを見ていた。

「ああ、驚かせてしまったかな? 恋人同士の会話に横槍を入れるのは不躰だと分かっていたけれど、そちらの可憐なお嬢さんの表情が曇り始めていたからね」

「は、はあ……?」

女性ながら王子様のような立ち振る舞い、低トーンボイスから繰り出される独特な台詞回しに、たじろいでしまう。

そこに端正な容貌も合わさると、一般にイケメンと呼ばれる男性より魅力的なのでは……? そんな考えさえ浮かんでしまう。

「わかりますかあ、ほんとダメダメな彼氏なんですよ〜」

悪ノリし始めた摩美々は組んでいる腕を、更にぎゅっと力を込めて

絡める。

「そうだね。確かにきつきの発言は頂けないかな」  
「えつと……『摩美々がお昼ご飯を食べている間に、自分一人がここへ買いに来る』と言ったことですか？」

「ああ。思い出したのなら、その言葉で彼女が不機嫌になつてしまつた理由を考えてみるといい。彼氏であるキミなら、きつとわかるはずさ」

いや、そんな断言されても……。

とは言え考えてみないことには始まらないので、先程の会話を頭の中でもう一度振り返る。

機嫌が下がったのは、摩美々の質問に『並ぶことで摩美々が暇してないかどうか』と答えた時。

次に『摩美々がお昼ご飯を食べている間に、自分一人がここへ買いに来る』と言ったら、更に機嫌が悪くなって……と……あ。

「デートだから、俺と一緒にいたかった……とか？」

「うーん、正解と言いたいところだけど、答えに自信なさげな感じは彼女に対してよくないよ？」

「まあ良介なんで、おまけで許してあげますねー」

「……ありがとう」

なんとなく不服ではあるが、一応感謝の言葉を述べる。

摩美々のことだからデートと意識させるのは、からかいの意味かと思っていたのだけど……不味い、このまま考えていると本当に恋人として捉えてしまいそうだ。

「フフ、美男美女の仲を取り持つお手伝いが出来てなによりだ」

「はは……。ん？ どうした摩美々？」

困惑する自分をよそに、じつと目の前の女性を見つめる幼馴染み。

しばらくしてなにかわかったような表情に変化するとそのまま口を開く。

「思いだしたあ。この人、少し前に読んだ雑誌に載ってましたねー」

「そうだとすると、えつと……お姉さんの職業はモデルですか？」

「今は元モデルかな。この前、素敵なお仕事のお誘いがあつて、そちら

に興味を惹かれてしまったからね。それとお姉さんは少しくすぐつたいな、私はまだ高校生だからキミたちと歳は変わらないと思うよ。でもキミのような可愛い女の子に顔を覚えてもらえているなんて光栄だ。フフ、彼氏がいるのは本当に残念だな、フリーなら私が付き合いたいくらいさ」

「そこまで——」

「摩美々は俺の彼女なんで、あきらめてください」

王子様の雰囲気を感じさせる女子高生の付き合いたい発言は、なんだかイケメンが言っているように思えてイラツときたため、摩美々の言葉を強引に遮って彼氏宣言をしてしまう。

「ふふー、ごめんなさいー。まみみの彼氏はあ、独占欲が強いのでー」  
その言葉を聞いて上機嫌になると頭を俺の肩にのせ、ニヤニヤしながら言い放つ。

「クス、これは参ったな」

そんな自分たちの様子を見て嬉しそうに笑う女子高生。

お目当ての品を買う順番が回ってくるまでの間、知らぬ間に仲良くなった女性を含めた三人で雑談をしながら待つことで、退屈しないどころか楽しく時間を潰すことができた。

ちなみにこの女子高生の名前は白瀬咲耶と言うらしい。

下手なイケメンよりカッコよくて、女性人気も高そうな人だったな。

\*\*\*\*\*

「ほらほら、カフェでお茶するくらいいいーじゃん！ ボクらにつきあってよー」

「あ、あの……わたし、ここで待ち合わせを……」

「マジ！ もしかかしくなくてもキミの女友達とかつしょ?! てか、キミ包帯してるけど怪我してね？ オレらで見てあげるから場所かえ



よーぜ」

「……その、ケガをしてるわけじゃ、ないんです……」

アクセサリーショップで欲しかった商品を手に入れたあとの予定は、摩美々の好きなブランドで洋服選び。

白瀬さんと別れ、目的のお店に行く途中のコンビニで小休止している最中の出来事。

コンビニ前に立っていた儂げな女の子を、少し前から大学生二人組がナンパをしていた。

少女はおとなしい、もしくは弱気な性格ながらもちゃんと断っているのだが、男二人のチャラっぽいノリと声の大ききで、その意見はことごとく無視されている。

ナンパの方があきらめるか、女の子が自力で追い払えば理想的なのだがそううまく事は運ばない。しばらくその様子を観察していたが、痺れを切らした二人組は手を掴んで強引に連れて行こうとした。

「お兄さん、お兄さん」

そんな大学生の背後から声をかける。

二人は女の子に夢中なのかすぐに気付いてくれなかったので、何度か呼びかけこちらに振り返ってもらおう。

「……なんだよ、イマこの子とカフエにいくところ——ゲッ!!」

「どしたの〜? お邪魔虫——って、警察の犬じゃん!!」

邪魔をされ不機嫌になった二人は自分を確認すると表情が一転、会いたくない人に遭遇してしまった時の気まずい雰囲気を出す。あと別に警察とはなんの関係もないんだけど……

警察の人たちには、主に摩美々関連でお世話になり、一緒に探してもらったりしたこともある。

たまにそのお礼として簡単なお手伝いとかをしている内に自然と仲良くなっていた。

ちなみにこの二人に会うのはこれで三回目かな?

一度目と二度目はお手伝いの一環で、迷惑行為(ちなみにその時もナンパ)の取締りを行った際に出会った。大学生と言うことぐらいで

名前とか年齢は知らないけれど。

「お久しぶりです。ナンパするのは構いませんが、強引な行為は駄目ですよ?」

「チツ……そこまでムリヤリでもねーし。オイ、べつんトコいこーぜ」  
「あーあ、可愛い子と出会えたとこまではよかつたのに……ついてないな」

自分の言葉に、軽く文句を言うとその場から去っていく二人組。  
残された少女は戸惑っているのか、腕に巻いた包帯を押さえながらこちらをチラチラと見ている。

先程までは男二人の体に隠れていたため、顔以外よく分からなかったが少女の着ている白いワンピースは儂い部分をより際立たせ、雰囲気と非常にマツチしていた。

それ以外で特徴的なのは肩から肘にかけて巻かれた包帯と、おでこや腕に貼られた絆創膏。

「もう大丈夫。それと人を待っているなら、コンビニの中の方がまだ安全だと思うよ」

そう言つて、一言だけアドバイスをする。

そして元居た場所まで戻るためにその子から離れようとする、女の子は引き止めるようにして声を紡ぐ。

「……あの、助けてもらったお礼……ちゃんと言わせてください……！」

助けたと言うより向こうが国家権力に物怖じしただけで、俺は何もしていないから感謝されるのは心苦しいな……。

「いや、自分は——うお?!」

「彼女のことほおっておいて、他の女の子口説いてるとか最低なんですケド」

背中にいきなり強い衝撃を受け、少しよろめく。

後ろを振り返ると、背中に抱きついた幼馴染みがジト目をこちらに向けていた。

「放っておいたんじゃなくて、摩美々のトイレが長い——痛い痛い！  
耳を引っ張るな！」

「そ、その……わたしは、助けてもらっただけで……」

「おーい!!」

「霧子ー!」

状況を説明しようとした少女の言葉を遮る声。

聞こえた方向を見れば、手を振りながらこちらに向かって走る男女二人組。

男性の方は長身で、キリツとした魅力的な男顔が印象に残る。

スーツ姿であることや、その雰囲気などを考えるとおそらくは社会人だろう。

その隣の女性は、モデルやアイドル並のスタイルの良さが一際目を引く。

可愛らしいその容姿を見る限り、摩美々と歳はそこまで離れていないと思われる。

「遅くなつてすまん、霧子!」

「もー、プロデューサー! 忘れ物で遅うなるなんて、うちのこと言えんばい!」

「はは……ところで二人は霧子のお友達かな?」

「いえ、自分たちは——だから痛いって! 少し大人しくしていなさい!」

二人から霧子と呼ばれているのは先程ナンパされていた少女。

その霧子さんの知り合いで待ち合わせ相手であろう二人に、これまでの経緯を説明しようとするともた耳を引っ張られたため、いつものように叱ってやめさせる。

お互いの自己紹介後、大学生二人組にナンパされていたことや、その様子を見ていた自分が助けたことなどを、霧子さんを交えて一から話し始める。

ちなみに摩美々との関係は恋人と言っておいた。そうしないと話がややこしくなりそうだし。

ただ、会話中にプロデューサーと呼ばれた男性が、摩美々のことを

興味深く観察していたのが気掛かりだけど……。

「そうだったのか……ありがとう二人とも。霧子も、遅くなったせいで怖い思いをさせて悪かった」

「い、いえ……わたしは、良介さんに助けてもらったので……」

「ばってん霧子が無事でよかったばい。ありがとうね〜」

詳細を聞いたプロデューサーさんは再度、幽谷さんに謝罪。

そして月岡さんから、アイドル仲間を助けてもらったことに感謝される。

自己紹介の時に分かったことだが、幽谷さんと月岡さんは283プロダクションのアイドルらしい。

プロデューサーさんから『アイドルやユニットはもうすぐ発表できると思うから、それまで他言無用で頼むね』と言われたけど、ユニット名は三峰の話で知っている。

「……………話が少し変わるけど、君、アイドルに興味はないかな?」

「私ですかあ?」

和やかな空気を破ったのは、プロデューサーさんの摩美々に対するその一言。

「綺麗なのは勿論だけど、そのパンキッシュな格好や、服装に負けないくらい独特の雰囲気を持つてる……一目見て、素質があると思ったんだ!」

先程の優しいな雰囲気とは打って変わり、本職の真剣な表情で摩美々をスカウトしている。

……そう言えば三峰が、田中と和泉がアイドルにスカウトされるのは時間の問題とか言ってたな。

「……………ふふー、でもまみみには彼氏がいるので、アイドルにはなれませんねー」

とは言えこの子がアイドルなんてやるわけないか。

ポテンシャルは確かにあるかも知れないけど、毎日練習とか面倒臭いと思っていそうだし、やる気で駄目だろう。

腕を組んできた上、胸を押し付けてくる悪い子に対し、そんなことを考え気持ちを落ち着かせる。うん……駄目だ落ち着かない。

「ああ、それは最初から分かっていたから大丈夫。俺としては『彼氏持ちの悪い子アイドル』として売り出していきたくて考えているんだ。だから、鈴木君と付き合ったままで問題ないし、むしろそこがアピールポイントだと思ってる」

「……彼氏持ち、アイドル……」

「おおー、ばりおもしろそうなアイドルやなあ」

「いやいや、それは無理がありません?」

暗黙の了解としてアイドルに恋愛はご法度。

確かにこのアイドル戦国時代で、多種多様なキャラや属性があることは知っている。知っているがさすがに彼氏持ちアイドルなんて聞いたことないぞ?!

内心では非常に驚きながらも、平静を装いプロデューサーさんに問いかける。

「言うか現役アイドル二人もそんなに驚いてない……俺がおかしいわけじゃないよな?」

「そんなことはないさ。アイドルと言っても一人の人間、恋愛もするだろうし、いつかは結婚だってありえる話だ。実際に結婚後、活動しているアイドルもいるしな」

「仮にプロデューサーさんの言うアイドルになったとして、世間から受け入れられるものなんですか?」

「そこら辺に関してはちゃんとりサーチしたり、他プロダクションの先輩から意見を聞いたりしたから問題ないよ。田中さんが全面的に受け入れられない——なんて結果にはまずならないはずさ」

確かに最初から公言しているなら、その時点でファンの選別は出来る。

『彼氏持ち』と言う点が嫌なら好きにならないし、活動中に彼氏が居ることが発覚するよりは何倍もマシだろう。

「……勝手に話を進めますケド、まみみアイドルになるなんて言うてませんよー」

「それじゃあアイドルになれば、なにかやりたいことが見つかるって言ったらどうする?」

「え——」

「ともかく名刺だけでも受け取ってくれ。少しでも興味が出てきたら連絡してくれると嬉しいな」

そう言っつて自分の手に名刺を握らせる。

そして再度、幽谷さんの件でお礼を言い、三人は駅前方面へと歩いて行く。

「……………」

先程までアイドルになるなんて、まったく興味のなかった摩美々々。今、その摩美々々の視線は自分が持っている名刺に注がれていた。

## 悪い子と告白

283プロダクションの人たちと別れ、最後に回るお店は摩美々行き付けのゴシックブランド。

ダークな雰囲気店内に流れるミステリアスなBGMをバックに、数名の女性客は自分が惹かれた商品を手に取って睨めっこしている。

レディース専門店のため当然ながら男性客は俺一人だが、幼馴染みに連れられ、ここ以外にも様々な場所を経験しているので恥ずかしさ等は感じない。むしろ今は――

「……………」

どこかぼんやりしながら、適当に洋服を取っては元の場所へ戻す行為を繰り返している摩美々が心配だな……。

自分の好きなブランドで、これから着ることになるであろう洋服選びをしていると言うのに、俺をコーデイナートしていた時より遥かにやる気がない。

原因は分かっている。

あの時のプロデューサーさんが放った一言。

『それじゃあアイドルになれば、なにかやりたいことが見つかるって言ったらどうする?』

小さい頃から甘やかされ、何をやっても褒められる。

失敗しても怒られず、悪戯をしても周りは見えて見ぬフリ。

もちろん俺は、厳しくする時もあるれば叱ることもある。

だが、俺以外の大半が肯定的な環境で育った摩美々には、どこか虚しさのようなものを感じるものがあつたのかも知れない。

「(そう言えばあの時も…………)」

中学三年生の頃、一度だけ摩美々と大喧嘩をしたことがあつた。

その時の自分は生徒会とバスケ部で忙しかったこともあり、幼馴染みにあまり構ってあげられない時期が続き、色々な意味ですれ違いを起こしてしまう。

結果的には元の鞘に収まったため、今もこうして良好な関係が続いているのだが……

『生きていく意味がわからない、は大きいですけどー、なにかをやりたいて思ったことがなかったんですー』

大喧嘩をした際に言われた摩美々の本音。

その言葉の通りであれば、おそらく今もやりたいことは見つからないのだろう。

だからこそ、プロデューサーさんの言葉が引っ掛かっている。

「それに加えて、多分この前二人で見に行った765プロのライブも原因の一つか？」

今や誰もがその名を知っている一線級の人気アイドル——765 PRO ALLSTARSの十三人。

本来であれば、あの三峰でさえチケットを取ることが難しいライブに行く予定はなかったのだが、二日目の方に急遽行けなくなった三峰とその姉——結華さんから二人分のチケットを貰ってしまったので、幼馴染みを誘い二人で観に行くことにした。

俺も摩美々も、アイドルのライブには何度か参加したことがあるため、上記のライブが初めてではない。

ただライブに参加する度、ステージの上で輝きを放つアイドルを見て、稀に羨ましそうな表情を浮かべる点は少し気になっていた。

そして今回の765PRO ALLSTARSのライブでは、終始舞台から目を離すことなく羨望の眼差しで、十三人のアイドル達が紡ぎだす歌と、一人一人の個性が色とりどりに光る姿を見ていた摩美々。

終演後は、今まで観たライブの中で一番の余韻に浸っていた自分とは裏腹に、あきらめにも似た表情で唇を噛みしめていた。

「(やっぱり摩美々は——)」

そんなことを考えていた矢先、自分の携帯の着信音が静かな店内に響き渡る。



……お店の中で話すとうるさいだろうから、外で話した方がよさそうだな。

「摩美々、ここだと他のお客さんに迷惑だろうから外で話してくる」

「はい……」

ちゃんと聞こえているのか怪しい、呆けたような返事を聞き心配ながらも、かけてきた相手を無視するわけにもいかないの、そのまま店外へと向かっていく。

着信メロディが鳴っている携帯をズボンのポケットから取り出し、画面に表示されている名前を見る。

「(そうだ、この人に相談してみよう)」

\*\*\*

『やつほー、りょうたん！ あなたの大好きな三峰お姉さんですよ』  
「こんにちわ、結華さん。先日はライブのチケット、ありがとうございます」  
「ました」

電話をかけてきたのは三峰真幸のお姉さんで、名前は三峰結華さん。

弟がイケメンならば、その姉も例に漏れず美人な女子大学生。

『いいって、いいって、お姉さんと弟君の仲じゃない！』

「結華さんの弟は三峰真幸で、自分じゃありませんよ？」

『……実は今まで秘密にしていたんだけど、三峰の本当の弟はりょうたんだったの!!』

「はは……もしそうなら嬉しいですけど、冗談でも弟にバレたらショックで自殺しそうなので自重してくださいね」

ああ見えて、あいつは重度のシスコンだからな。

そこも残念なイケメンたる所以なんだろうけど。

『おっけおっけ、わかってますよ』

耳に当てたスマホから軽快なトークが聞こえてくる。

自由奔放でノリがいい結華さんはコミュニケーション能力も高く、初対面の人とも気後れせずに会話ができるため、人と仲良くなるのも早い。

『ところで、我が弟分はな〜にを悩んでいるのかな〜?』

「いや、用があるのは結華さんの方では?」

『おやおやく? お姉さんに隠し事とは生意気だぞ。さあ、正直に白状するんだ!』

この人と仲良くなってしまうえば、小さな変化も見逃してもらえないらしい。

ただノリがいいだけでなく、人のことを非常によく見ているため、どんな細かい部分も鋭い目線で発見してしまう。

今回は電話越しだけれど、声色あたりから気付いたのだろうか?

自分ではいつもの調子で話していたはずなんだけれども……。

「……本当に、よく分かりますね。エスパーなんですか?」

『ふっふっふ、バレては仕方がない。実は三峰、サイキックパワーの持ち主で——』

「はいはい。まあ、悩みと言うより相談があつて……」

おふぎけ発言に対し食い気味に返事をしたあと、本題を話し始める。

幼馴染みが283プロにスカウトされた先程の出来事、アイドルのライブを観る度に見せる羨望とあきらめの表情など、関係がありそうなことは包み隠さずに伝えた。

自分が話し終わったあと、相槌を打ちながら聞き手に徹していた結華さんは、考えをまとめているのかしばしの沈黙。

数秒ほどして、相変わらず口調は軽いが、いつもよりトーンの下がった真剣味を帯びる声で会話が再開される。

『なるほどねー、その幼馴染みちゃんについては弟とりようたんから聞いてたけど……うん、やっぱり三峰の考えもりようたんと一緒にな』

俺と結華さんの結論として、摩美々はアイドルになろうかどうかを迷っている、それは間違いない。

なりたい理由は、夢や憧れではなく今まで見てきたアイドルたちは皆『やりたいこと』を心の底から楽しそうに行っているから——実際にライブを観ればお客の自分たちにもそれがひしひしと伝わってくる。

最初は三峰の付き合い程度で参加していたはずの俺も、いつの間にかライブを楽しむようになり、アイドルにも好意を持つようになった。

気持ちが変わった訳は、月並みな表現になるが観ていると元気が出たり、勇気をもらえるからだと思う。

『もつとも、決めかねている一番の理由にりようたんがいると思うけどね』

「自分……ですか？」

『そうそう。と言うか、りようたんこそどうなのさ？ 大好きな幼馴染みがアイドルになるって決まった場合『彼氏』が嘘だつてちゃんと説明する必要もあるだろうし』

「あ……そう、ですよね……」

元々はプロデューサーさんが俺たちの関係を勘違いしているだけであつて、実際にスカウトを受けることになったらきちんと説明しないといけないのか。

……でも、その場合は彼氏持ちじゃないアイドルとしてデビューするんだよね……。

それがアイドルの在り方として当たり前だと言うことは分かっている。

受け入れれば、摩美々との距離も遠く離れてしまうだろう。

「(一般人とアイドルの関係になれば、当然だよな……)」

好ましくない考えばかりが、浮かんでは消えるを繰り返す。

自分の中で肥大化していくメランコリー状態を打ち破ったのは、結華さんが放った一言。

『そんなわけだからさ、告白しよっか』

「……………はい？」

聞いた瞬間、憂鬱な気分はすぐに霧散する。

いきなりなにを言っているんだこの人は？

『だからあ、りょうたんが好きなたに愛を伝えるんだってば！ このままだと「追憶のサンドグラス」ルートに突入しちゃいますよ！』  
「告白する前から失恋確定させるのやめてもらえますか？」

『追憶のサンドグラス』は765プロに所属するアイドルの一人――星井美希の持ち歌で失恋ソング。この前の765PRO ALL STARSライブでも熱唱していたからよく覚えている。

『でもこのままだと、それに近い状態になるでしょ？』

「それは……と言うか、俺が摩美々を好きなこと知っていたんですね」

『ま、三峰お姉さんに隠し事は通用しないってね。実際、幼馴染みちゃんがアイドルに惹かれてるのは事実なわけじゃん？ なら結果はどうあれ、自分の気持ちを伝えて笑って送り出すか、胸に秘めたまま後悔し続けるかの違いじゃない？』

結華さんの言う通り、自分の片想いが成就するか『追憶のサンドグラス』ルートになるかは別として、想いを伝えなければ後悔の二文字が一生つきまとうことは間違いない。

……アイドルになって摩美々自身が『やりたいこと』を見つけられるならこの上なく嬉しいし、告白にしたっていつまでもくすぶっている自分に、神様が与えてくれたチャンスだと思えば……！

『ちなみに告白しないでヘタレた場合、りょうたんへの好感度は急降下一直線なんでそこそこヨロシク！』

「はは……結華さんの中で、自分の好感度はそんなに高いんですか？」  
『そりゃあもう！ 具体的にはマップであと三回、三峰を選択してくればルート確定ぐらいかなー』

「……ごめんなさい、そのルートには入れません。それとありがとうございます、結華さん」

『ん〜？ 三峰あんまし頭がよくないから、なんでお礼を言われたのかが分からないぞ〜？』

通話を切る直前でも、感謝の言葉を素直に受け取ってくれない面倒見のいいお姉さん。

そして最後に激励の言葉を投げかけてもらい、会話が終了する。  
……よしっ！ 俺も覚悟を決めよう！

フラれたとしても摩美々が自分の道を見つけて幸せになるのならそれでいいじゃないか！

「……まあ失恋の時は、気持ちの整理がつくまで時間が掛かりそうだけど……」

そう言えば結華さんの用件を聞いてなかったな。

俺の相談が優先ってことは、後回しでもいいような内容だと思う……多分。

次、電話をかけてきた時か会った時にでも訊いてみよう。

\*\*\*\*\*

「あーあ、結局大事なこと伝えそびれちゃったなあ……」

さつき電話したのは相談に乗るためじゃなかったんだけど……可愛い弟分の一大事ならしやうがない。三峰的には一肌脱ぐ理由しかないもんね。

三峰がアイドルになったって言うサプライズは次回の楽しみにとっておきましょう！

「でもりょうたん真面目だからなー、驚くより自分のことのように喜びそう。と言うか、その様子が容易に想像できちゃいますよ」

それにしても、まさかりょうたん意中の相手がスカウトされるなんて予想外だったな。

ま、結果的に告白の流れまで持って行けたなら、万事オツケーってね。

あの子は鈍感難聴系キャラじゃないんだけど、幼馴染み限定でそれに近い——すれ違いのような感じが続いている。

『好き』だと言うのに一歩踏み込めないから、自分の気持ちは理解できても肝心な幼馴染みの気持ちは理解できない。明らかに気がある

であろう言葉も、まったく別の意味で捉えてしまう。

親愛と恋愛の境界線が曖昧になっているところも含めて、長年一緒にいた弊害なのかな？

まあ弟や本人から聞いた話を総合すると、相思相愛で間違いないんですけどね。

「こうなったきっかけが、三峰秘蔵のレアアイテムのおかげとはねえ……」

りょうたんに譲った765PRO ALLSTARSの二日目のライブチケット。

本来は弟と一緒に両日参加の予定だったんだけど、直前で346プロの外せないライブと被っちゃって……二日目に参加できなかったのは断腸の思いだったよ……。

そう言えばプロデューサーも、二日目に参加したとか言っていたよ。うな……。

確かあのあとぐらいから『アンティーク最後の一人はやっぱりあの子しか……』とか声をかけなかったのを後悔してる眩きだったけど、もしかして――

「おや、もう来ていたんだね、結華」

「あ……遅くなってごめんね、結華ちゃん……」

そんなことを考えていると、事務所の扉が開いて顔見知りの四人が姿を現す。

ん、遅くなった理由はPさんのせいかな？

「いろいろあって、約束の時間ば過ぎてしまってたね」

「だが思わぬ収穫も……と、悪い結華。待たせることになってしまった」

「も、三峰寂しくて死んじやいそうだったんだぞ、Pさん！ ついでに年下の彼氏にもフラれちゃうしさー」

「うっ……すまん。……ん？ ちよつと待て！ 今、彼氏って言わなかったか?!」

おおっ、ここまで食いつかれるとは……彼氏持ちアイドルとして想定していたのは、りょうたんの幼馴染みだけだったってことか。やつ

ぱり二日目のライブで目を付けていたんだね、Pたん。

そう考えると、初対面で彼氏がいることに動揺することなく、スムーズにスカウト話に持って行けたのも納得だよ。

「やだなあ、三峰を待たせたPたんへの冗談に決まってるじゃないですかー。でも少しは反省してくださいよ？　じゃないと本当に彼氏作っちゃいますからね！」

冗談だとわかった瞬間、心の底から安堵するプロデューサー。

さっすが三峰演技派。

「結華ちゃんも……彼氏持ちアイドルに、なるのかな……？」

「それやとキヤラって言うものが被らんと？」

「フフ、なら私が結華の恋人役に立候補しようか」

「こらこら、悪ノリしないでくれ、咲耶。まあ遅くなった原因の俺が言うのもなんだが、おかげでアンティーカ最後の一人が決まりそうだし、その人物は間違いなくりょうたんの幼馴染みだよな。」

でもこれで283プロの四ユニット全部が完成かく、ようやくアンティーカ始動！って感じ。

「そうなたらよかばってん、断られんと？　なりたかねら即答するやろうし」

「確かに、プロデューサーも彼女がどこか迷っていると言っていたね」

「摩美々ちゃん……受けてくれるといいな……」

「はいはい、三峰はメンバー入り確定だと思いまーす！　なぜなら三峰の第六感がそう叫んでいるから！」

呆れた視線を向けるのがたんとプロデューサー。苦笑するさくやんときりりん。

ふっふっふ、ネタバレしている三峰にはすべてが視えているのだよ！

……なーんて、ホントはりょうたん次第なんだけど。

ともあれ背中を押したのは三峰ですから、陰ながら応援しなくっちゃね。

「——頑張れ、良介」

\*\*\*

「へえー……こんな場所あつたんだあ……」

高台から見る街を照らす色とりどりの光は、まるで七色の蛍が点滅する様を見ているかの如く一瞬で目と心を奪われる——そんな絶景を見下ろせる秘密の穴場。

ここは数年前までお世話になった女性警察官の人に教えてもらった場所で、その人曰く『ここで告白すれば、女の子のハートは撃ち抜かれること間違いなしよー!』とテンション高く力説していたような……。

あのあと緊張しながら、摩美々に大事な話があることを伝えた俺は告白のプレッシャーに押し潰されそうな気持ちを鼓舞して、なんとかここまで来ることができた。

道中、二人に会話はなく無言のまま。

俺はこのあとの告白のせいで緊張状態が続いていたため、なにか気の利いたことを話せる余裕はなかった。摩美々は……多分、アイドルのことだろう。

「それでー、話ってなんですかねー?」

口調はいつも通りだけど、さっきいたゴシックブランドショップと同じで、心ここにあらず——そんな感じがする。

「あ、ああ。その……アイドルにスカウトされたことについて、なんだけど」

「……………」

「摩美々はさ、アイドル、やってみたいのか?」

「…………んー、アイドルってー、学校終わりとかに毎日練習するんでしょー。それはちよつとめんどくさそーな感じなんで、断ろうかなあ」



「そっか。面倒臭くなければ、やりたいってことなんだな」  
「あ……」

凶星を突かれた摩美々は、俺から視線を逸らすと気まずそうに自分のツインテールをいじる。……やっぱり、やってみたってことだよな。

結華さんは迷ってる一番の理由は自分だと言っていた。

あの電話のあと、その事を考えてみたけれど結局わからず仕舞い。摩美々本人に訊いたところで、教えてくれない可能性しかない。

それなら——こうしよう。

俺の幼馴染みは悪戯好きで、とつても優しい悪い子だから。

「それじゃあ今から俺が、アイドルとは関係ない方の話をする。正直、結構恥ずかしいと言うか……勇気がいる感じで、言いにくいことなんだ。だから摩美々も迷っている理由、教えてくれないか？」

「……良介の言うこと次第ですかねー」

いざ告白の瞬間がやってくると、わかっているも心臓はバクバクと高鳴り、ひどく口が渴く。覚悟を決めていようが、どうにもならないところはあるようだ。

とは言え、結華さんにあれだけ発破をかけてもらって、今ヘタレてる場合じゃないよな……！

「えつと……その……小さい頃かりや、たつ、田中摩美々のことが大好きでした！ 幼馴染みじゃなく恋人として、これからも一緒にいさせて下さい！」

長年ためこんだ想いを言い切った俺は、そのまま摩美々のことを見つめながら返事を待つ。

正直、恥ずかしさで顔が赤くなり、告白相手から視線を外したい衝動に駆られるがぐつとこらえる。

突然の告白に、摩美々は先ほどから「あ……」とか「……え」などの言葉しか発していない。しばらくすると、ようやく現状を理解した摩美々がゆつくりと口を開く。

「……あ、その……今すごく恥ずかしいので、ちよつと目をつぶってほしいんですケド……」

「わっ、分かった！ 大丈夫になったら教えてくれ！」

長年一緒に過ごしてきた幼馴染みでも見たことがない、可憐に恥ずかしがる表情。

そんな姿に動揺して、すぐさま言う通りに目を閉じる。

体感時間では、摩美々が落ち着きを取り戻すまでとても長い時間経過していると思った。

沈黙に耐え切れず、声をかけるために言葉を紡ごうとして唇に意識を集中させると――

「ん……………」

摩美々の小さく漏れる息と共に、押し付けられる柔らかい感触。

えっ?! いや、これって――そういうことだよな?!

何をされたのか頭で理解していても、現実の処理が追いつかない。

そんな驚き戸惑う自分に、更に追い打ちが加わる。

「……………むぐっ!!」

口内に摩美々の舌が侵入してくると、拙い動きながら俺の舌を吸うように絡めてくる。

口の中の水分や今の気持ち、その他もろもろを一気に吸い取られ、現状の把握は困難に。

「……………ふふー、もう目をあけてもいいですよー」

あまりの出来事に放心状態だったこともあり、反射的に摩美々の言葉に従う。

そこには悪戯好きな表情で、不敵に笑う幼馴染みの姿。ただ頬が紅潮していたのはいつもと違うところ。

『おもしろい表情ですねー』とクスクス笑いながら観察されていることに気付くと同時に、今この状況に対する意識もはつきりとしてくる。

「……………お、おまつー！ 舌――」

「まみみも『小さい頃かりゃ』大好きでしたよー。これからはあ、恋人としてよろしくお願いしますねー、良介」

俺の噛んだ告白をいじりながらの、摩美々らしい返事。

だけどそんな意地悪が気にならないくらい、可愛く嬉しそうに微笑

む姿に目を奪われる。

——この日、俺と田中摩美々は恋人同士となった。

## 283プロ交流編

### 悪い子と後輩

「だああああ……ようやく終わりやがったぜ」

四時限目の授業終了を告げるチャイムが鳴ると、前席に座っている三峰が自身の机に、吸い込まれるような勢いで突っ伏す。

科目はこの男の大嫌いな数学だったことを考えると、眠らなかつたのは奇跡だな。

「ん……っ、三峰、お疲れ〜」

隣で大きく伸びをする和泉がねぎらいの言葉をかける。

こちらは三峰と違って苦手科目でも真面目に授業を聞き、理解しようとして努力している。

一度四人で勉強会を行った時も、教えがいがあったのは当然、和泉の方。……と言うより、三峰が真剣な表情でノートに向き合っていると思つて感心したのも束の間、書かれていた内容はプロダクションの垣根を越えた、アイドルの自作オリジナルユニット名。

アイドル同士の絶妙な組み合わせや、無駄にクオリティの高いネーミングセンスで余計に腹が立った記憶がある。その氣力を今勉強している科目に回せ！と。

「三峰だからあ、授業内容は聞いてないんですけどねー」

「寝ているならまだしも……少しは結華さんを見習ったらどうだ？」

「うるせー、学力オバケコンビに言われたくねえやい！」

ガバツと起き上がり、後ろを振り向いた三峰が拗ねるように言い放つ。

実際に俺も摩美々も、テストの合計点については上から数えた方が早い。

自分は一科目90点以下はなし。摩美々に関してはやる気にムラがあるため、一科目80〜100点の間と言ったところ。

「そうそう！ 授業聞いてるだけで高得点とか、ぶっちゃっけ羨ましいしよー！」

「まあそこに関しては、生まれ持った記憶力に感謝だな」

和泉の言う通り、毎日の授業を受けているだけで先ほど挙げた点数はとれる。

小さい頃から一度見聞きしたことを覚えるのは得意で、簡単には忘れなかった。

「汚ねえぞ!! チートだ、チート!!」

「そうだそうだー、良介の卑怯者ー」

「オメーも充分チートキャラだろうが! なんで勉強しないで80以上とれんだよ!」

同じく授業を受けているだけで高得点の摩美々は、物覚えが早い。

記憶力が優れているだけなら自分と変わらないが、摩美々はどんなことでもそつなくこなす天才型。

スポーツを例に挙げると、それぞれに正しいフォームや適切な動きが存在する。

一回で正しいフォームや適切な動きを頭が理解したとしても、体ですぐにそれを表現するのは難しいだろう。と言うより自分は出来ない。

逆に摩美々は、一回教わり頭で覚えれば、それをすぐに動きでも表現できる。

ただし最終的には本人の気分次第などところが大きいいため、やる気になればの話ではあるが……。

「そういや二人は時間大丈夫なん? プロデューサーが迎えにくるとか言ってなかった?」

「ああ、もう準備して行くよ。ほら摩美々、三峰とじゃれ合う暇があるなら、事務所向かう支度をしてくれ」

あの告白のあと、プロデューサーさんに連絡を入れた俺達は、提案された『彼氏持ちの悪い子アイドル』としての話を受ける返事をした。

後日、283プロダクションの事務所で詳細の説明と、書面による契約内容の確認を行い、俺の恋人は晴れてアイドルに。

そして自分も、アルバイトとして283プロに雇用されている。

この部分に関しては、プロデューサーさんが恋人であることを配慮

してくれたらしく

『アイドルになって二人の時間がとれずに別れる——そんなことになったらスカウトした自分自身が許せないからね。もちろん俺としても、そんな状態にさせないよう色々と考えているんだけど……そうだ！ 良介君さえよければなんだけど——』

そう言っただけで自分に、283プロの男性事務員としての仕事を紹介してくれた。

現在の283プロに従業員は合計三人しかおらず、社長の天井努さん。女性事務員のアルバイト、七草はづきさん。そして正社員はプロデューサーさんただ一人のため、雑用等で人手があると助かる状態らしい。

入社当初は雑用全般をこなしながら、空いた時間に、はづきさんから事務仕事を教わる日々。

最近になってようやく、簡単な事務処理程度であれば出来るようになったが、正直はづきさんには遠く及ばない。

ちなみにアイドルである摩美々と同じように、仕事のため途中で抜けたりすることに関して、普段の生活態度やテストの点数等を考慮してくれた結果、学校側が特別に認めてくれた。ある程度、自由な高校でよかった……。

「えー……まだ早いと思うんですけど」

「何事も時間前行動しておくに越したことはないぞ？ とするか、アイドルとして働いているんだから少しは自覚を持つべきだ」

「ふふー、お節介な彼氏を持つと大変ですねー」

自分の机で未だにだらーっとしている恋人を叱ると、相変わらず嬉しそうに返事をする。

アイドルになったとはいえ、時間にルーズな部分は変わらないようだが、こういうところも徐々に直してあげないと駄目だな。

その後、和泉と三峰に別れの挨拶をして、準備を済ませた摩美々と共に教室を出ていく。

校門前で待つこと数分、予定時刻より早く到着したプロデューサーさんの車に乗って、事務所向かった。

「にしても摩美々がアイドルになるなんてね〜」

「そんなの当然だぜ！ オレのアイドル眼アイに狂いはないのだっ！」

「外見的な意味じゃなくてさー、まあ楽しそうにやってるカンジだから応援あるのみっしょー！」

「おうよっ！ 親友として全力でサポートしてやるぜ!! それと一番驚いたのは、田中がアイドルになったことより——」

「あの二人が、まだ恋人じゃなかったことだよな（ね）〜」

\*\*\*\*\*

「ほらほらー、良介さんと摩美々ちゃんも早くお弁当だしていっしょに食べよっ」

283プロの扉を開くと、テーブルの上にお弁当を置いてソファに座る恋鐘さんと、イルミネーションスターズの三人が、自分と摩美々を出迎えてくれた。

今日は、先に来ていた四人と摩美々を合わせた五人で、午後から近場のスタジオを借りてダンスレッスンを始める予定。ちなみに自分は、はづきさんと一緒に事務仕事。

四人がまだ昼食をとっていなかった理由は、俺たちを待っていてくれたいたらしい。

そして先ほどの言葉を発したイルミネーションスターズの一人——八宮めぐるに腕を引っ張られ、ソファの前まで誘導される。そのまま腰かけると、今朝作ったお弁当をみんなと同じようにテーブルの上に置く俺と摩美々。

「その……すみません。めぐるには、先輩にも都合があるからって伝えたくんですけど……」

「ああ、気にしなくてもいいって。俺たちも事務所に着いてから食べるつもりだったしさ」

申し訳なさそうに謝るのは同じくイルミネーションスターズの一りで中学時代の後輩——風野灯織。自分が生徒会長を務めていた頃、灯織は会計と書記の二仕事において、非常に優秀な役員だった。

「さあさあ、みんなでいっせいにフタをあけるばい！ せうのっ！」

「ほわあ……恋鐘ちゃんのお弁当、すごくおいしそうだね」

「えへへ、そうやろ、そうやろ！ うちの手料理は何でも絶品たい！」

そして恋鐘さんの手作り弁当を誉めるほわほわした癒し系の少女は、イルミネーションスターズのリーダー——櫻木真乃。

と言うか恋鐘さんの料理、本当にすごいな……実家が定食屋だって聞いているから、そのせいもあるんだろうけど。

並べられた各々のおかずを見ても一際異彩を放つ、長崎の代表的な卓袱料理——東坡煮（皮付きの豚の角煮）に目を奪われがちだが、灯織の手作り料理も負けてはいない。

東坡煮並みにインパクトのあるおかずはないが、バリエーションとバランスは完璧。

中学の時より更に腕を上げている、やるな……！

「むくく、みんなが手作り弁当って知ってたら、わたしも自分で作ってきたのにー」

一人だけコンビニ弁当の八宮さ——じゃなかった、めぐるは自分だけ仲間外れになったような気分なのか、悔しそうな表情を見せる。

「それやったら、今度作って来んね。楽しみにしとーばい！」

「うんっ、そうするよー！ あっ、真乃のハンバーグおいしそうっ！」

「えっと……よかったら、めぐるちゃんも食べる？」

「やったー！ ありがとう真乃！ 灯織と良介さんと摩美々ちゃん、恋鐘ちゃんのもおいしそうだね！」

「それ、自分以外の全員じゃない……もしかしてみんなのを食べてみたいとか？」



「ならおかずの交換っこすりゃよかばい。みんなうちの手料理たべてみてー」

めぐるの言葉が発端となり、みんなでおかずをシェアしながら昼食をとる。

……やっぱり恋鐘さんの料理はどれもおいしい。正直、今の自分のレベルより数段上だな。

むっ……！真乃もなかなか……。灯織は、やっぱり腕を上げてるな……俺の一步先を進んでいる……くっ！

「ほわわ……！　すごく真剣な表情でなにか考えているけど、おいしくなかったのかな……」

「違うと思うよー。たぶん三人の料理を分析でもしてるんじゃないですかねー」

この味付けだと砂糖の分量は……いや待て、他にもなにか隠し味が入って――

「ふふ……そう言えば先輩、負けず嫌いでしたね」  
「……………」

「あ、あの、摩美々さん？　私の顔になにか付いてますか？」  
「べつにー」

\*\*\*\*\*

「へえー、灯織、生徒会に入ってたんだ？」

「まあ中学一年生の時だけね。それがきっかけで先輩と仲良くなったの」

良介が三年生で生徒会長をやっていた時の話ですねー。

あの頃はお互いすれ違ってばかりだったなあ……。

「二・三年生ならまだしも、入学したばかりで右も左も分からない状態の一年生が手を挙げるとは思ってたよ」

そう言えば私たちが通っていた中学校は、生徒会長以外の役員は選

挙げやなくてー、各学年から一人か二人、候補者として名乗りを上げた人の中から、生徒会長が選ぶ仕組みでしたっけー？一年生は灯織だけだったのかなあ？

「あの時は、その……私なりに理由があつて……」

「生徒会に入る理由かあ……進路とかは有利になりそうやなあ」

実際、良介は中学校側からの推薦で一発合格でしたしねー。

そのあと一般入試で受験する私に勉強を教えてくれたのは嬉しかったなあ……。

ほんとは教えてもらわなくても余裕だったのは内緒ですけどー、ふー。

「あと学園祭とか行事の内容もいろいろ決めることができるんでしょ?! なんかおもしろそー!」

「……生徒会は遊ぶところじゃないんだけど」

「はは、どちらかと言えば大変なことの方が多いよ。けど、八宮さんみたいな人は、俺や灯織とは別の視点から意見を出してくれそうだ。全体の空気も明るくなりそうだし」

「あーっ！ また名字で呼んでるよっ、良介さん!」

283プロに入って1か月近くの良介じゃあ、フランクな感じにボロが出るみたいですよー、三峰。と言うかあ、三峰弟の姉が同じメンバーだとは思わなかったケド。

真面目な恋人が早く事務所のみんなと打ち解けられるように、名前と呼ばせるようにしたりとかいろいろ考えてくれてるみたい。なんか良介以上にお節介な人……。

でも、そんなお節介な三峰のおかげで私も……。最初は恋鐘やみなどと、こんな風に話せるようになるなんて、思ってたし……。

……私がアイドルと良介で悩んでた状況も、解決されちゃったし。

「……………ふー」

「急に笑ってどがんとしたと、摩美々？ このあとのダンスレッススが楽しみと?」

「ダンス……私もまだまだ出来ないから、一緒にレッスンするみんなに迷惑をかけないよう頑張らないと駄目だよね……！　むんっ！」  
「んー……レッスンのことじゃないんだけどー、真乃の残りのポテトサラダ、ぜんぶもちらつてもいいー？」

「うん、あと一口分くらいしかないけど……はい、摩美々ちゃん」  
「ありがとー。あと東坡煮用の余ったからしもらうけど、いいよねー、恋鐘？」

「そりゃ構わんばってん、なんにつかう——」

言葉の途中で『はっ！』つとした顔になった恋鐘は気づいたみたい。からしをポテトサラダの中に隠して……完成！。恋人をほおって他の女の子二人と楽しそうに話す彼氏にはあ、お仕置きしないとダメですねー。

「それじゃあ、真乃からこれを良介に渡してほしいんだけどー。理由は適当に『食べきれないから』とかで大丈夫なんでー」

「でも……このサラダからしが入ってるけど、大丈夫なのかな？」  
「良介はサラダにからしを入れる派なんでー。あと、ほら……健康のことも考えて野菜も、って、まみみから渡すの恥ずかしいし……」  
もちろんウソですけどー。

あ、恋鐘が驚愕の表情でこっちを見てる。ふふー、この前のカラシ入りシュークリームを思いだしたのかなあ。

「ほわっ！　そっ、そうなんだ。疑っちゃってごめんね、摩美々ちゃん」

そう言つて会話に夢中の三人に話しかける真乃。  
少しは反省してくださいねー、良介。

——まみみも独占欲、強いのでー。

「……ごほっ、ごほっ！　なんだこのからきはっ?！」

「ほわわっ！　どうしよう摩美々ちゃん、私なにか間違えちゃったかな?！」

「ふふふー」

「……ま、摩美々ーっ!!」

「ばり恐ろしか恋人ばい……」

## 悪い子とヒーロー

「よし……いー これで完璧」

トイレ入口付近の手洗い場に備え付けられている大きな鏡を、めがね拭きを使って仕上げ拭き。元々綺麗に使用されていたため特に目立った汚れ等はなく、端に若干の水垢が付着していたくらい。

改めてトイレ全体を確認すると、心の中が満足感で満たされる。

掃除をすることで汚い部分が綺麗に——ピカピカに輝く瞬間つてやっぱいいよなあ……。摩美々は『専業主夫でも目指してるんですかー?』とか言っていていじってきそうだけど。

小さい頃、仕事で忙しい両親を少しでも手助けするために始めた掃除や洗濯、炊事と言った家事全般の作業。その行為をいろいろな人に褒められ、子供らしく気分をよくした俺はもつと褒められたい一心で、よりうまくこなせる方法を考えながら家事にのめり込んでいった。

……まあ、趣味レベルで好きになるとは思わなかったけどさ。

「わあ……!!」

後方からの、元気一杯な大声に少し驚く。

振り返るとそこには予想通りの人物、283プロ唯一の小学生アイドル——小宮果穂が目をしていたけのようにキラキラさせながら、自分に羨望の眼差しを送っていた。

「おはよう、果穂ちゃん。トイレ掃除なら今終わったところだから、すぐに出ていくね」

「おはようございませすっ、良介さん！ みなさんから聞いた通り、やっぱりスゴいですっ！」

「えつと……ごめん、凄いつて言うのはなんのことかな？」

「あたしたちの事務所で、良介さんが掃除したところは全部ピカピカになっちゃうところですよっ！」

自分のことのように強く断言する果穂ちゃん。

そしてトイレ内の他の場所を見ては『おおー!』『スゴいですっ!』と言った、清掃員が嬉しくなるような発言をしてくれる。この283

プロ内の清掃は自分が担当しているけど、みんなも綺麗になったと感じてくれていたんだな。

そんなことを考えていると、一通り見回った果穂ちゃんが戻ってくる。

そして再び目をキラキラさせながら、トイレ掃除のコツを訊いてきた。どうやら今、果穂ちゃんが自分の家のトイレ掃除当番らしい。

「それなら少し待っててくれるかな？　今、後片付けを——」

「あたしもお手伝いします！」

自分から手伝いを申し出てくれた果穂ちゃんと一緒に、掃除用具を所定の位置へと戻していく。その最中たくさんの質問攻めにあつたが、気分がよくなった俺はドヤ顔で清掃知識をベラベラ語っていたと思う。

そんなある種ウザい掃除自慢と言うべき話も、嫌な顔一つしないどころかこちらを尊敬するような眼差しと共に、褒めちぎってくれる。本当にいい子だよな……三峰が天使つて言う理由も分かる気がする。

\*\*\*\*\*

「ただいま戻りましたあー！！」

「……おかえりー」

果穂ちゃんが元気よく事務所の扉を開けると、ソファの方からだらけきった返事が聞こえる。その声の正体は俺の恋人兼幼馴染み。

「もう少ししたら果穂ちゃんと一緒にラジオ収録だろう？　そんな怠けた格好をしているとやる気になるまで時間が掛かるんじゃないのか？」

「大丈夫ですよー、まみみやれば出来る子なのでー」

「……否定できないところが地味にムカつく」

「ふふー」

ソファに寝転がり、背杵に両足をのせスマホを利き手で持つ。

スマホをいじるわけでもなくただぼんやりと、まるで『私、無気力です』と言わんばかりの姿勢。……見様によつては下着が見えるんだから、普通に座ってくれ。

「いえ、これは摩美々さんの作戦なんです！」

力強く宣言する果穂ちゃんを見て、恋人に厳しい眼を向ける。

作戦って……摩美々め、適当なことを吹き込んだんじゃあるまいな？

「果穂はあ、よくわかってますねー」

「はいっ！ だらけているように見えて実は力をたくわえる『何もしないこと』作戦ですね!!」

それは時間を無駄にしているだけじゃないのか？と思ったが、口に出しかけ言葉を呑み込む。最後まで話を聞けば、もしかしたら意味があるのかもしれない。……たぶん。

そう信じて、果穂ちゃんの説明を聞き始める。やっぱりと言うべきか、徐々に雲行きは怪しくなり、最終的には純粋な小学生を口八丁で言葉巧みに丸め込んでいると判断した。

何もしないことが休息につながり、活力が回復するかは人それぞれ。少なくとも果穂ちゃんは、年齢的にも性格的にも、何もしない時間がリフレッシュすることにつながるタイプじゃないだろう。むしろ大好きなヒーロー番組を見ている方がよっぽど有意義な時間の使い方のはずだ。

「だからあたしも、きちんと力をつけるために、今度なにもしないで過ごそうと思ってます」

「純粋な子に嘘を教えるんじゃありません」

未だソファに寝転がっている摩美々に近づき、額を軽く小突く。

「ウソじゃないですよー、まみみは充分リフレッシュ出来ますからねー」

「お前はな。ただ、人によつては自分の好きなヒーロー番組——つと、そう言えば果穂ちゃん、そろそろジャステイスVと同じくらい好きな日曜特撮番組が始まる時間じゃないか？」

「良介の大好きなお面ライダーですねー」

黙れ摩美々、それ以上、余計なことを言うんじゃない！

いい歳した高校生が、子供向け特撮番組を観ていることがばれるだろう！

「良介さんもヒーローが好きなんですかつ?!」

素早く摩美々の言葉に食いついた果穂ちゃんが、弾むような声で勢いよく迫る。

確かに特撮番組——と言うより、ライダーシリーズが子供の頃から現在に至るまで大好きだけど……どうしよう、正直に言っただけか？

そんなことを考え沈黙していた自分を見て、果穂ちゃんの表情が徐々に曇っていく。おそらく、自分の沈黙を『好きじゃない』と言う意味で捉えてしまったのだろう。

自身のライダー好きが広まる恥ずかしさと、天使を天秤にかけた結果は、純粹無垢な天使の圧勝。羞恥心とかもう知らん、この子の陰る表情をこれ以上見ていられるか！

「お面ライダーシリーズしか観てないけどね。ちなみに一番好きなのはアギトだよ」

「おおっ！ あたしもアギトが一番好きで、ライダーシリーズの最高傑作だと思いますっ!!」

ひくどころか喜々として内容に踏み込んでくる果穂ちゃん。なんと言うか……こう、共通の趣味を語り合えるっていいな。歳もそのまま離れてない上、心身共にしっかりしているから同級生の特撮好きな女子と話してる感じで会話も弾むし。

そのまま二人のアギト談議が始まり、他ライダーシリーズの話にまで発展していく。

正直、果穂ちゃんが俺の知識についてこれることに驚愕した。確かに果穂ちゃんのヒーロー愛は本物で、過去の——自分が生まれる前の特撮番組でさえ網羅しているし、なによりその楽しそうな語り口調から大好きな気持ち伝わってくる。

「あの一、そろそろ始まるんじゃないんですかあ？ 今やってるお面ライダーの……ディケイド？」



「ジオウ（ですっ）!!」

「……なんでもう息ぴったりなんですかねー」

その後、果穂ちゃんと、まるで兄妹のように仲睦まじくジオウを視聴した。

ただ、自分たち二人が熱中している様子を、スマホで撮っていた摩美々に気付けなかったことは一生の不覚だが……。

\*\*\*

「……………」

昼下がりの午後の事務所。静まり返った事務所内では、キーボードで文字を打つ音とマウスのクリック音がよく響く。

今自分が行っている作業は、283プロに所属しているアイドル16人各々のレッスン日や、プロデューサーさんが取ってきてくれた仕事内容などをまとめ、一人一人のスケジュール表を作成している。

このスケジュールは六月以降——つまり『W・I・N・G』の出場資格を手に入れるための戦いが始まる時期。シーズンごとに審査を受け、定められたランクに達していないアイドルはその時点で出場資格を失う。

新人アイドルにとっては夢の舞台、俺も頑張ってみんなのサポートを——なんて意気込んだはいいものの、いかんせん、はづきさんとプロデューサーさんが優秀すぎる。

スケジュール表作成と言っても、土台となるわかりやすいテンプレートは、はづきさんが用意してくれていたもので、こちらとしてはスタートから物凄くやりやすい。

ならば入力後の確認作業で役立とうと奮起しても、レッスンで各アイドルの予定と都合が合わなかったり、取ってきたお仕事でダブルブッキングなんてことは一切見受けられなかった。正直、プロデューサーさんは所属アイドル全員の、事細かな予定が頭に入っているん

じゃないかと思ったほどだ。

「所属アイドル全員分のスケジュール表作成、終わりました。確認お願いします、はづきさん」

隣の席で、同じく事務処理をしていたはづきさんは作業の手を止め、後ろから自分のパソコン画面を覗き込み内容を確認する。

「はい、大丈夫ですよ。よくできました」

十六人分のチェックを素早く終えたはづきさんからOKサインが出されると同時に、頭をなでられる。褒められた時たまにされるけど、少し面映ゆい。

「ありがとうございます。……あの、そろそろ恥ずかしいので、終わりにして頂けると……」

「ふふっ、すみません。最近、弟が反抗期なのか頭をなでさせてくれないんです。なので、良介君にしているんですよ」

はづきさん曰く、弟と自分の歳が近く雰囲気も似ているため、つい弟に接するような感じになってしまいうらしい。同年代と比べ老けているところも『りょうたんが気づいていないだけで、まだまだ幼い部分があるの。年上のお姉さんは、そのギャップにやられちゃうんだぞ』と言う結華さん談にも納得していたけれど……

「あの、はづきさん、自分にある子供っぽい部分ってどこなんでしょう？」

「そうですね……真面目で大人っぽく見えるのに、お面ライダーが好きなのところとか」

「……できれば忘れてもらえませんか？」

「摩美々さんから送られてきた動画を見てびっくりしちゃいました。果穂さんと一緒になって応援する姿がとても微笑ましかったですよ」

容赦なく傷口を抉られ、恥ずかしくなって黙り込んでしまう。

まさかジオウを観ていたところをムービーで撮られていたとは思わなかった……よりにもよって一番盛り上がっているシーンを。

「これを見た他の皆さんとも、より仲良くなれますね」

摩美々の行為に対するフォローなのか、はづきさんが一言つけ加え

る。

まあ、本当に人が嫌がることはしない子だから、みんなとの距離を縮めるためにやってくれたんだろう。……たぶん、きつと、そう思いたい。

「おはようございます！」

そんなことを願っていると、事務所の扉が開き所属アイドルが入ってくる。

どこことなくやる気に満ちあふれた挨拶をしたのは放課後クライマックスガールズのメンバー——園田智代子。スーパーの袋を持っているけど、お菓子でも買ってきたのかな？

「おはようございます、智代子さん」

「おはよう、智代子。確か今日は休みだと思うけど、自主レッスンでもしに来たのかな？」

「いえ、今日は果穂と桜餅マスターを目指して特訓です！ 今度メンバーのみんなと一緒に桜餅パーティーを行うので！」

「ああ、そう言えば朝に果穂ちゃんが言ってたな。もうすぐ事務所に着くって連絡が摩美々からあったし、そろそろ二人一緒に帰ってくると思うよ」

「えっ?! もう来ちゃうなら、急いで準備しないと……!」

少し焦った様子でダイニングキッチンへと向かう智代子。

果穂ちゃんが戻ってきた時にスムーズにスタート出来るように場を整えるのか。料理作りもお菓子作りも、準備が一番大事だしな。

「良介君、智代子さんを手伝ってあげてください」

「えっ? でもまだ仕事が——」

「実を言うと、今日良介君にやってもらったお仕事は、本来であれば二日後にやる予定のものだったんです。予想以上にこなすスピードが早くてミスもないので、先の仕事を振っていたんですが……終わらせてしまった今、ストックがないんですよ」

「なら雑用でもなんでもいいのでなにかありませんか? 一応まだ業

務時間中ですし……」

「うーん、そう言われても掃除等は済んでいますからね。私の抱えている業務で、先のものでありますけど、これはまだ良介君に任せられませんし……やっぱり智代子さんのお手伝いをお願いします。良介君の業務時間の使い方は社長から、教育係である私に一任されていますから心配しなくても大丈夫ですよ」

本当にいいのだろうかと思いでいた自分の考えを見越して、先に伝えてくれる。

少し申し訳ない気はするけれど、社長も全幅の信頼を寄せるはづきさんが言うことだし、大丈夫だよな。どの道、これ以上やれる仕事がないなら、果穂ちゃんが楽しくお菓子作りをできるような環境を整えてあげる方が、有意義な時間の使い方だし。

そう納得し、自分もダイニングキッチンに向かう。

そこでは智代子が慌てながら用意を始めていたが、いかんせん使用する道具の場所が分からず四苦八苦している。まずは落ち着かせるところから始めないと……。

\*\*\*\*\*

「よし、それじゃあ今度は生地を焼いてみよっか」

「はい、ちよこ先輩！がんばりますっ！」

あのあと軽くパニツク状態だった智代子を鎮め、道具の準備等を済ませたところで、仕事を終えた二人が事務所に戻ってきた。果穂ちゃんも当然として、摩美々が一緒にやりたいなんて言い出すとは思わなかった。その理由が『面白そうだから』と聞いて納得したけど。

今行っているのは、こしあんを作り、生地をなじませたあとの作業。中火で熱したホットプレートの上に、なじませた生地をお玉で流している。

「お玉にすくう生地は1杯弱で、楕円形を意識して流し入れるといい

よ。入れた生地をお玉でならすことも忘れずにね」

「わかりましたっ！」

元氣よく返事をした果穂ちゃんが、言われた指示をてきぱきとこなしていく。

日頃、母親のお手伝いをしていることもあつて手際がいい。一度、智代子・樹里と練習してるみたいだし、大丈夫そうだな。

「良介ー、生地が破けてきたんですケド」

「……入れたあと、よくならしたのか？」

「ちゃんと言うとおりにやってますよー」

そう言われたので、破れた原因がどこにあるのかを調べるため、摩美々が焼いているホットプレートを見る。生地の形が不格好だけど、今は関係なさそうだし……他は——と、端に付いている温度調節ダイヤルが目に入った瞬間、すぐさま原因を理解する。

「最大火力で焼けば、そりゃあ破けてくるわ！　なんで人が設定した温度を勝手に変えてるんだ、摩美々ー！」

「なんかあ、焦げてる方がパリッとしてておいしそうじゃないですかー」

「餃子作ってるんじゃないんだぞー！」

余計なアレンジを加えようとした摩美々を一喝すると、そのままフオローに入る。

とりあえず弱火に戻して……生地のはちは充分乾いてるから、表面はもう大丈夫——と言うか、たぶん少し焦げてるだろうな。焦げてる方がおいしいとか言っていたけど、この子の場合、たぶん早く焼きたいだけか……？

裏面を焼かせるため、摩美々にフライ返しを手渡す。やけどしないように注意しながら生地をひっくり返させ、表と同じように焼かせる。

その後、裏面を焼き終えた摩美々と果穂ちゃんの生地を冷ませば、こしあんを詰めるピンク色の皮の出来上がり。先に作った丸めたあんこを皮の中に入れ、最後に桜葉で包んで、二人の長命寺桜餅が完成した。

「みなさんが作った桜餅、おいしそうですね」

「はづきさんも一緒に食べませんか！ あたしが作った桜餅の感想を聞かせてくださいっ！」

テーブルの上に並べた桜餅の甘い匂いで、仮眠をとっていたはづきさんが目を覚ます。

俺と智代子がお手本として作った物、果穂ちゃんの特訓の成果が表れた物、少し焦げて形が歪な摩美々の物、それぞれ並ぶ中、摩美々の桜餅を手に取り口へと運ぶ。

「ふふー、恋人が作った桜餅は、おいしいですかあ？」

「……甘い、すごく甘いんだけど……これは悪戯じゃない。」

『面白そうだから』なんて理由から、用心はしていたのに……一緒に作業した本当の理由は、お花見した時の約束を実行してくれたのか。来春まであと約一年だから、少し気が早いけど素直に嬉しいな。

「ああ、おいしいよ。砂糖は軽量スプーンを使うこと、早く生地を焼きたいからって温度を最大にしない、以上の二点が守られていればなおよかったけど」

「……いつもみたく怒らないんですかあ？」

「悪戯じゃないからな。少なくとも食に関しては、お前が一生懸命作ったかそうでないかの区別くらいつくさ」

摩美々が悪戯するなら、今食べた甘さより数十倍くらい上の物が出てくる。

まあ、計量が面倒臭くてアバウトに砂糖を入れたり、時間短縮のために最大火力で焼いたりするのは摩美々らしいけど。

「そこまで言うならあ、まみみが作った桜餅、全部食べてくれるんですよー」

「もちろん、大好きな恋人が一生懸命作ってくれた物だから全部貰うよ」

「……………」

それに――

「いつもの四人でお花見した時に交わした『今度は一緒に桜餅を作る』って約束、早速叶えてくれたしさ」

「……良介のくせに生意気なんですケド」

面白くなさそうな顔で、こちらを見つめる摩美々。

そんな不機嫌そうな表情が可愛く見えるぐらいに、一緒に料理できたことは嬉しい。

つて、まずいな。さつきから自分の顔が緩み切ってる感じがする。

でも今度は、摩美々と俺だけで、協力して美味しい物を作ってみたいな……………。

「甘いねー」

「甘いですね〜」

「はいっ、この桜餅とっても甘くておいしいですっ！ ……あれ？

ちよこ先輩とはづきさん、どうして目の前の二人を見ながら食べているんですか？」

## 悪い子とインドアな姉

『頼む良介！ 一生のお願いだ!!』

通話中のスマホから聞こえるは、必死に助けを求める親友の声。別に助けなくても、三峰になにか起きるわけじゃないから問題ないのだけでも。

「……今月に入ってこれで三回目、お前の中で一生のお願いは何回あるんだ？」

『この世に存在するアイドルちゃんの数だけあるに決まってるぜ!』  
「分かった、それじゃあな」

『ウソウソ、冗談だから切るなつて! 今回の時限ゲリラはレア系のドロ率三倍で、運がよければ普段落ちない伝説級のアイテムも手に入るんだよ!』

三峰の一生のお願いとは、十六時より始まるスマホゲームのゲリライベントに参加しろと言うもの。このスマホゲーム、元を辿れば今流行りの大人気オンラインゲームから派生した物で、通称記憶ゲーと呼ばれている。

アプリでは、大元のオンラインゲームを有利に進められるアイテムが手に入るため、オンラインゲームユーザーは勿論のこと『記憶力が楽しく鍛えられる』等の理由から、普段ゲームをしない人もプレイするほど。

俺がプレイしている理由は、記憶力の良さを三峰姉弟に狙われた――この一点に尽きる。

まあゲーム自体は一人でもみんなでも面白いし、隙間時間を潰せたりするから何気に重宝しているけどさ。

「はいはい……一時間拘束されてくればいいんだろ？」

『わっほっほい！ 良介愛してる！ これで心置きなくリライブを楽しむことができるぜ!!』

電話越しながら、隠し切れない喜びの気持ちが言葉の端々から伝わってくる。

三峰がゲリラに参加できない理由はもちろんアイドル関係で、十六



時より始まるリリースイベントの方を優先しているから。

CD発売に併せて行われる、この販促イベントは今の時期が最も苛烈を極める。

理由は言わずもがな『W. I. N. G.』が関係していて、リリースベのアイドルたちもほとんどが新人アイドル。

「……アンティーカーのリリースイベントは、確か5月31日だったな」

イルミネーションスターズと放課後クライマックスガールズの二ユニットは既に終わっている。アルストロメリアは今週で、アンティーカーがトリを飾る。

「……あ、あの……」

通話が終了したあと、うちの事務所のリリースイベントを考えている自分に弱々しい声が掛けられる。電話中、事務所のソファに腰かけスマホをいじっていたアルストロメリアのメンバー——大崎甜花が背後でまごまごしていた。

「えっと、もしかしてうるさかったかな？ そうだったら、ごめんね」

「その、違って……ゲームのこと……」

「ああ、電話で話していたこのスマホゲームのこと？」

「そ、そう……！ 良介さんも……プレイしてるの……？」

「オンラインゲームの方は手を付けてないけど、こっちはそこそこやっているよ」

甜花の趣味は、お昼寝・ネットサーフィン・アニメ・ゲームとインドア系な趣味が多かったはず。それなら当然、流行りの大人気オンラインゲームもプレイしているか。

「甜花はどっちもプレイして……それで、その……四時から……ゲリラ……」

発した言葉は文末に向かうにつれ、だんだんと小さくなっていくがなんとか聞き取れた。

さすがに一人＋CPUでクエストに挑戦するのは骨が折れるし、やり込んでいそうな甜花なら戦力として申し分ない——と言うか絶対強そう。

加えてあのフレンド二人がログインしてくれていれば、まず負けることはないだろう。

出来れば居てくれて欲しいけれど……最悪二人でもなんとかかなかな？

「それならあと少しで始まるイベント、手伝ってもらえないかな？

自分は一时间丸々やるけれど、出来る範囲でいいからさ」

「あ……い・甜花も終わるまでやるつもり……なーちゃんが戻ってくるの、五時過ぎだから……」

表情がパアッと明るく変化したところを見ると、甜花も協力相手を探していたんだな。

アプリを起動すると、まずはお互いのキャラクターのステータスを確認する。

えっと……『Devil Tarot』が甜花のキャラ名か。ジョブは見た目が可愛いデフォルメキャラの悪魔妖精。このキャラ、どことなくデビ太郎に似ているんだよな……。

付けられたキャラ名からして、甜花も大好きなデビ太郎に近いから使用しているんだろう。特徴は……確か、魔法特化で特に闇属性が得意、HPが減ると魔法威力も上がるキャラクターか。そして予想通りレベル・ステータス共に最大、装着アビリティにも無駄がない。

「……良介さんは、付与術師……なんだ……」

自キャラの『Ryo』は主にバフがメインの付与術師。このゲーム、上級までならゴリ押しすることは可能だが、超級と伝説級（ゲリラ時限定）はバフ・デバフのサポートなくしてクリアは不可。更に敵の行動に合わせたバフやデバフをピンポイントでかける必要性が、記憶ゲーと呼ばれる所以である。

「敵の行動パターンは頭に入ってるからね。みんなをサポートする役が一番適任ってよく言われるよ」

「すごい……い・甜花、攻略サイトで行動パターンを見ながらやってる……でも、スキル決定までの制限時間が短いから……よく時間切れで負ける……」

いいアイテムを入手するには超級を回すのが一番手っ取り早い。

ただし超級以上は先ほど言ったようにバフ・デバフのサポートが前提になっている難易度。

そしてある程度、敵の行動パターンを読む必要があるので攻略サイトをしながらやろうと思っても、スキル入力までの時間が短く間に合わないこともあり、超級以上はそのミスで負けるパターンが多い。

Lily knightさんがログインしました。

vivid rabbitさんがログインしました。

甜花とお互いのキャラクターを確認していたところ、自画面にシテムメツセージが表示される。三峰姉弟と並ぶ最強格のフレンドと言っているこの二人は『vivid rabbit』と『lily knight』。

Lily knight：Ryoさんこんにちはー！

vivid rabbit：こんにちはわくわく( ^ ▽ ^ )

「良介さん……この人たちは、フレンド……？」

「そうだよ。何度かパーティーを組んで超級や伝説級を回ったけど、二人とも強くて頼りになるんだ。ちよつと待って……今誘ってみるから」

Ryo：こんにちわ。四時からゲリラいきますか？

Lily knight：大丈夫です！私たちもそれ目当てで来たので！

vivid rabbit：一時間丸々、ビビッと付き合うよー！

よし、この四人でパーティーを組めば負けることはないだろう。

そう思い声をかけようとしたが、甜花のどことなく不安そうな表情が気になる。

「どうした、甜花？ なにか気になることでもあった？」

「えつと……甜花がパーティーに参加しても、大丈夫……？」

「大丈夫だよ。lilyknightとvividd rabbitはいい人たちだから、すぐに仲良くなれるんじゃないかな？」

「わかった……甜花、頑張る……！」

ネット上とは言え、人見知りで会話自体苦手な甜花にとつてはチャットも大変なんだろう。クエストが始まったらそこまで話すことはないだろうけど……二人と仲良くなれるように会話のサポートもしてあげた方がよさそうだな。

Ryo：ありがとうございます！もうパーティー組んでいるので、申請送ってください！

Lily knightさんからパーティー申請がきました。

vivid rabbitさんからパーティー申請がきました。

申請を承認すると、自分と甜花のパーティーに二人が加わる。クエストは最大四人まで。これで準備が整いあとは開始時間を待つのみ。

「あ、あいさつしないと……！」

Devi Tarro：こんにちわ

Lily knight：初めましてDevi Tarroさん！よろしく願います！

vivid rabbit：（・・▽・・）ノヨロシク！

Ryo：Devi Tarroはちよつとチャット慣れしてないから、シンプルな文面になっちゃうけどゴメンね

Lily knight：了解です！

vivid rabbit：Devi Tarroさんのアビすごい！最強クラスの物が何個かある！オンラインの方から送った奴？

Devi Tarro：うん、雷系の奴がそう。サンドラ倒した時に手に入ったよ

Lily knight：サンドラって雷鳴竜サンダードラゴン？

でもアビ系のアイテムなんてドロップしたっけ？

v i v i d   r a b b i t : ソロ討伐限定で雷鳴竜のウロコと一緒に落ちるよ〜\ ( \* ・ ω ・ ) ココ重要!

L i l y   k n i g h t : 雷鳴竜をソロ?! D e v i   T a r o さん  
すごいっ! どうやって攻略したんですか?

D e v i   T a r o : えつと……やり方は――

甜花の使用キャラ――D e v i | T a r o の装着アビリティが切っ掛けで、三人の会話内容が広がっていく。l i l y k n i g h t と v i v i d | r a b b i t もオンライン版をプレイしているため、話が合うんだらうな。……俺はまったくついていけないけれども。

ゲーム雑談が盛り上がりを見せる中、ゲリライベントの開始時刻になると当初の予定通り、イベント終了まで伝説級クエストをひたすら周回した。

パーティー構成は闇魔法特化の悪魔妖精 D e v i | T a r o、聖剣を使用し光物理特化で攻める勇者 v i v i d | r a b b i t、風属性の専用サポート・アタックスキル持ちでアシスト性能抜群な風の戦士 l i l y k n i g h t、そしてバフ・デバフで的確にサポートを行う付与術師の自キャラ R y o

結果は負けなし。加えて伝説級のアイテムが入ったことを考えれば大勝利と言っているいだらう。ただ最後の相手……炎狼ヘルフレイムと雷鳴竜サンダードラゴンだけならまだしも、蒼龍エアリアルが出てきた時点でリタイア確定だらう……三人は挑戦すると意気込んでいたけど、俺は勝てる気がしなかったぞ？

「にへへ……レアアイテム……たくさん……」

ゲリライベントが終わり、パーティーを解散したあとはずっとあの調子で、スマホ画面に映るドロップしたアイテムを恍惚とした表情で眺めていた。

「お疲れさま、甜花。その様子だとお目当ての物が手に入ったみたいだね」

一息つくために淹れてきた二人分のココアをテーブルに置きなが

ら尋ねる。

「これ……雷鳴竜のキバ……！ ウロコよりレアで、欲しかった素材……！」

「……ん？ でも三峰は『キバを材料にして作られるのはハズレ装備！』とか言ってたようだな」

「みんなはウロコが欲しいと思う……クリティカル2倍、最強装備の、スターライトイヤリングが作れるから……。キバで作る、ダークライトイヤリングは、受けるダメージが増える……」

スターライトイヤリング、lilyknightが装備していた奴か。確かに攻撃回数が多い風の戦士との相性は抜群だった。一発の最大火力は特化の二人には及ばないが、攻撃した分のダメージを合計すればそこまで変わらないだろうし。

「でも……甜花のキャラ、HPが減るほど強くなるから……」

「なるほど。今から作ろうとしているその装備が、悪魔妖精Devil

「Tarroと相性最高ってわけだね？」

「そう……！ にへへ……」

「よかったな。あの二人とも仲良くなれたみたいだし……それに今度オンラインの方で遊ぶ予定なんだって？」

「うん……えっと、良介さん……」

と——それまで楽しそうに話していた甜花の表情が若干曇る。

「あの、今日は誘ってくれて……ありがとうございます……」

「いやいや、お礼を言うのは自分の方だよ。今回のクエストは強力な敵ばかりと出くわすし、甜花のHP1状態からの最大魔法に何度助けられたことか……本当、ありがとう」

「……甜花、ここに入る前は、ひとりでできるゲームばかりで……オンラインもソロでプレイしてたから……。でも、なーちゃんや、千雪さんや、みんなと遊んで楽しかった……だから、その……また甜花と一緒に、ゲームしてください！」

最後に可愛く囁んでしまった甜花は、顔を赤くして俯いてしまう。

恥ずかしがる甜花の問いに対する回答は、もちろん決まっている――

「いちいち、自分でよければ喜んで」

## 悪い子とリリースイベント

都内のストリートコートに響くはボールの弾む音と、それを一心不乱に追いかける者たちが駆け抜ける足音。

その足音の中で一際力強く地面を蹴り、自身に付いたマークを華麗なドリブル捌きで引き剥がし、コートを突き進む三峰。

そしてその勢いを切らさず攻める——ことは出来ない。

あらかじめ三峰の動きを予測し、インラインに素早く移動したディフェンス二人にオフENSEの機能は停止させられた。

だけど、これでいい。攻撃一人に対し、防御二人を消費させる意味合いは大きい。

「良介!」

エンドラインの少し前で待機していた自分に、パスが回る。

ノーマークの自分にパスが来ることを予測していた俺は、片手でキャッチすると同時にがら空きの左サイドへ高速のドライブを仕掛ける。

それにいち早く反応したディフェンスの一人が、ツーポイントライン前に立ちはだかるがこの間合いなら問題ない——瞬間的にそう判断し、マークについた相手に近づく際、ドリブルの強さを一段階上げる。

地についたボールは先程よりも強く跳ね上がり、自分の手に戻ってくる間隔が早い分コントロールは難しくなるが、スティール対策と、フェイントを看破できない状態を作りだす。

『止めろっ!』『奪え!』などの、相手チームから発せられる声で眼前に存在するディフェンスは目の色を変え、相対する俺の一挙手一投足を見逃すまいと注意を払う。

「(上等!)」

目線を右奥のゴール下へと向け、右足で一步踏み出す。

俺に対し集中力を研ぎ澄ませ注目していた長身の男が、同じ方向に動き出そうとしたことを確信した瞬間——軸足で小さくステップを入れ、左に切り返す。



「っ……い。もう後がねえぞ!! 当たれ!!」

クロスオーバーで相手デフエンダーを抜き去り、ハイスピードでゴール下へと向かう。

抜かれた男が放った大声に反応し、右から二人の相手が迫るがそれを無視してレイアップシュートを打つ。

「三峰!」

——フリをする。ゴール前でシュートを妨害しようと大きく跳んだ二人から視線を外さずに、右手で持ったボールを真後ろで待っているであろう人物にパス。

ツーポイントラインから少し後ろに下がった位置で、大胆不敵な笑みを浮かべた三峰がボールをキャッチするとゴールのみを見据え、お手本のような綺麗なシュートフォームからボールを放つ。

弧を描くように飛んで行ったボールはネットをくぐり、ツーポイントシュートを見事決める。後ろを振り返ると、ドヤ顔の三峰が俺に向けて笑顔でサムズアップしていた。

\*\*\*\*\*

「二人ともお疲れ、それとマジサンキュね!」

ストリートバスケットでの試合を終えた俺たちに労いの言葉とスポーツドリントを手渡してくれる和泉。アンテーカーのリリースイベントが始まる前に、バスケットをするなんて思ってもみなかった。こっちは自分と三峰だけだったし結構疲れたぞ……。

「気にすることないぜ! 体も充分あったまってるリイベ前のいい準備運動になったよな、良介!」

「黙れ体力馬鹿、そして抱き着こうとするな」

汗を拭いたタオルをこちらに向かって来た三峰に投げ付ける。すると、ふざけている雰囲気が一変——この世の終わりのような表情になり、慌てふためきながらもタオルを無事キャッチする。

「良介キサマア！ 女神に対しこのような無礼な仕打ち……万死に値するぞっ!!」

突発的に行われた試合のため、掻いた汗を拭くものなどせいぜいハンカチぐらいと思っていた時に三峰から差し出されたのは、常日頃持ち歩いていると言うお気に入り、高垣楓のタオル。

346プロに所属するアイドルで、過去にシンデレラガール総選挙と呼ばれる『W. I. N. G.』とは別のアイドルの祭典で見事一位に輝き、今や人気アイドルの一角を担う存在。

そしてその女神のタオルで俺が汗を拭くのはいいのか……？

「あははー……でもうちのせいでゴメンね。おな中の友達だからほっとけなくてさー」

「気にしなくていいって、どう見ても悪いのは向こうなんだから」

少し気まずそうにしている和泉だが『負けたらどいてやる』と言って、公共の場で順番も守らずにプレーを続ける方がおかしい。ただ、相手は口先だけかと思いきや、一応そこそこの実力を持っているようで、中学時代の女友達以外に順番待ちしていた数グループが相手の売り言葉を買って3on3の勝負を挑んだものの全員敗北。

それを見かねた友達思いの和泉が割って入り、俺と三峰の二人で三人を相手する2on3での勝負が始まる。余裕と言うより完全に舐めきった雰囲気の手相手チームだが、俺からしてみれば所詮少し強い程度なので人数不足は全く問題なかった。

味方の三峰に関しては、どんなスポーツでも平均以上を叩き出す万能キャラだし。

勝負の結果は21―2の大差で圧勝。一試合10分と言う設定された時間よりも早く、21点を先取してノックアウトさせた。それにしても……

「(なまった……)」

直前に見ていた他グループとの試合内容から、1点も取らせることなく決めるつもりでいたしそれが出来ると判断したんだけど……自分のパスミスでボールをとられてたら世話ないか。

「ホント、助けてくれてマジ感謝してる！ ってか、良介も三峰もヤバ

くね?! ちょースゴいスーパープレイ観てる感じだったし、マジすつげー!!」

「単に相手との実力差があるからそう見えただけだよ。本当にヤバいのは、本格的なバスケットをしたことがないのに、経験者並みの動きと力を出せる三峰の運動神経」

「あつははく、それ言ってる。——と、そーいやあの子、良介の知り合いなん? うちは試合途中で気づいたんだけどさー、ずっと良介のこゝと見てる系だし?」

言われた人物がいる場所へ目を向けると、学校指定制服であろう灰色のブレザーとミニスカートを着こなし、近寄り難いクールな雰囲気身をまとう女子高生——風野灯織が自分、と言うよりストリートコートをしつと見つめていた。

\*\*\*

「良介!!」

味方からのパスを受けて、左サイドに攻め込む先輩。

その動きに気づいて一人マークが付いたけれど、もう遅いと思う。先輩のバスケットは先読みやフェイントといった頭脳を駆使するプレースタイル、今も抜けると確信したからこそ動いたんだ。

試合を見る限り、2対3とはいえ先輩側と相手側とで実力が大きく開いている。

味方の人も経験者……なんだろうか? どの道、少し強い程度なら勝てない。私たちが通っていた中学校のバスケット部は、全国上位と言う好成绩を毎年収めている。そんな強豪校で主将を務め、エース級の活躍を見せていたのが先輩なのだから。

「三峰ー」

レイアップを打つと見せかけたフェイントに騙され、これから決まるシュートを潰えるような姿で相手二人が跳躍する。そして跳んだ

相手が地に足をつけた瞬間、三峰と呼ばれた人が放ったボールがゴールネットをくぐり、21―2というスコアで幕を閉じた。

「……よかった。先輩、バスケットを続けてるんだ」

試合終了と同時に、いつの間にか集まっていた多くのギャラリ―は、先輩チームのプレーを誉めたたえる。周りがざわざわと騒ぎだす中、私は心から『よかった』と安堵する。

そういえば今日の星座占い、魚座の運勢は一位で『長年気になってきた悩みが解消されるでしょう』って……当たったんだ。

「(……でも)」

さっきのプレーからは、あの頃の、バスケットが『大好き』な気持ちは伝わってこなかった。

私が先輩に憧れ、興味を惹かれた一番の理由は、バスケットが好きで楽しいという先輩の感情がたまたま観戦していた私に移ってしまうほどすごかったからなのに……。

入学当初は今以上に自分のことが大嫌いだった。けど先輩のバスケットをプレーする姿を観て、どうしたらあんな風に何かを好きになれるんだろうと、自分でも気づかないうちに考え始めていた。今思えば、学園祭に来たアイドルの人たちとあの時の先輩は似ている。

ステージ上のアイドルも、コート上の先輩も、お互いキラキラ輝いていて、見ている人みんなを楽しませ笑顔にするくらいのパフォーマンスやプレーを魅せる。アイドルも先輩も当時の私とは対極に位置する存在で……だからこそ、私は惹かれたんだろう。

「今の先輩は——」

「俺がどうかした？」

「きゃっ!？」

唐突に声をかけられ『びくっ!』と反応する。聞き覚えのある声が発せられた後方を振り返ると、そこには今考えていた人物が立っていた。……あ、メガネをかけてない先輩、久しぶりに見た。

「あっ……あのっ、バスケットの試合、すごかったですー!」

突然現れた先輩に驚きつつも、試合の感想を素直に伝えていく。

ただ、感想が先に進むにつれ私の悪い部分が出て――

「あの場面で、どうしてパスを出さないんですか？」

「いや、三峰とアイコンタクトで通じるほどの関係は……」

「パスミスでボールをとられた理由は、相手の動きが読めなかったからですよ？..」

「それは相手がたまたまイレギュラーな行動を、とって……」

「先輩、中学の時はもっと出来ていたと思うけど……」

「……はい。その通りです……」

気遣いのない冷たくキツイ言動で、結論だけを相手に伝えてしま  
う。

私にとってこんな話し方は本意じゃない、でも言葉選びが苦手であ  
まく喋れないから口数も少なくなつて……その結果、良くも悪くも要  
点のみをストリートな物言いです。そんな自分が嫌いだ……。

「——あ！ す、すみません、先輩！ 私また——」

「……つぶ、くくつ……」

自分自身の言葉を省みて慌てふためく私の姿を見た瞬間、こらえき  
れずに思わず笑いだす先輩。そんな先輩のことを、私はムツとした顔  
つきで見つめる。

「はは……ごめん、灯織。なんだかこういうやり取り、ずいぶん久しぶ  
りだなと思ってさ」

馬鹿にした笑いとは違う、どこか嬉しそうな笑み。

知り合って間もない頃の私は、もつと酷かったような……

『まずは書記の仕事をお願いしようかな。風野さんは話の内容をまと  
めたり、記録するのが得意みたいだし』

『あの……まだお互い親しくもないのに、少し見ただけでわかるんですか?』

『風野さん、とりあえず今自分が言った案をまとめてもらえるかな?』  
『会長、これが生徒会活動に役立つとは思えません。もつと、建設的な意見を出してほしいです』

『……ん? もしかして帳簿の金額と残高が合わなかったりするかな? 一人じゃ大変だろうし手伝うよ』

『必要ありません。会長は自分の仕事を進めてください』

うん……今の自分も嫌いだけど、あの頃の自分は大嫌い。過去の恥ずかしい出来事を思い出して死にたくなる気持ちって、こういうことを言うのかな……?

「……駄目だ、思い出したら懐かしくて余計に……」

「先輩……笑いすぎです。これ以上は……お、怒りますよ?」

「ごめんごめん、今の灯織を見てたら嬉しくて……調子に乗り過ぎたよ。灯織は学校の帰り?」

「はい、先輩は——」

「オレたちはこれからアンテーカーのリリイベに行くところっす!!」

私の言葉を遮るように、またも背後から声をかけられる。慌てて後ろを確認するとバスケの試合で先輩の味方だった人物——三峰って呼ばれていた人が、目をギラギラさせながら近づいてくるから思わず先輩の背中に隠れてしまった……こ、こわい……。

「ちよつ、ストップ三峰! アイドルに会えたからって暴走しすぎっしょ! おりゃ!」

男の人を追いかけてきたのは、スタイルのいい褐色肌の女性。さつきも二人と気さくに話していたし、友達で間違いないと思う。……たった今、三峰という人の頭を500mのペットボトルで勢いよく叩いていたけれど、そういうことが出来るほど親しい仲なんだろう、

きつと。

「オレのこと殺す気かあ、和泉イ！ けど……一瞬、子豚ちゃんになつて聖母に可愛がられる自分が見れたことは嬉しかったぜ！ サンキュー和泉！」

「これ怒られてる系か感謝されてる系か、どっちなん？ つか、いきなし子豚ちゃんとか聖母って……三峰どしたん、良介？」

「叩かれたシヨックで765プロ所属アイドルに会えました、ありがとう和泉』ってことを言いたいんだろ。ほら三峰、結華さんに報告されたくないならいつもの調子に戻って。灯織も恐がつているんだから」

「そういえばこの人、私たちイルミネーションスターズのリリースイベントに来てたような……それに今、先輩が結華さんって言ったし……もしかして——」

「あの、この前のリリースイベントで会いました……よね？ 結華さんのご兄弟の方、なんですか？」

「そうなんすよ!! オレのこと覚えてもらえてるなんてマジ感動つす!! あと、もし迷惑じゃなければサインお願いしてもいいすか?！」

「は、はい、大丈夫です……」

手渡された色紙にサインペンを使って、自分の名前を書く。

風の『几(かぜがまえ)』の部分を長く伸ばしただけの、捻りのないサインだけだ……。

「はっはっはっ！ うらやましいだろ、良介！ さつき女神のタオルに無礼を働いたことを詫びれば、色紙を分け与えることも——」

「はいはい、サインは大丈夫。それ受け取ったらイベント会場に向かうから、忘れ物ないようにな」

サインを書き終えたところで、心の中がちよつとだけ曇る。

大丈夫って、先輩は私のサイン……欲しくないってことなの、かな………？

「またまたあ、意地張っちゃって……負け惜しみかあ良介クン」

「やかましい。俺はもらえる時が決まってるからいいんだよ」

……あつ！ そうだ、どうしてそんな大事なことを度忘れしてし

まっただらう。

私が先輩にサインを渡す時、それは――

『……自分が目標とする、輝けるような存在……私自身が輝くアイドルになれたその時に、受けとって……もらえますか？』

「ふふっ……」

「ん？ どうした灯織？」

「いえ、なんでもありません。それより、私も勉強のためにリリースイベントを見に行く途中で……先輩方と一緒に行ってもいいですか？」

見ててくださいね、先輩。

私は……ううん、私たちイルミネーションスターズの三人で、必ず――光り輝くアイドルに、なってみせます！

\*\*\*

「みんな、今日はありがとう!!」

マイクを持った恋鐘さんが、この会場にいる人たちに向けて感謝の言葉を伝える。

今、行われているのはアンティーカのデビューシングル『BRILLIANT@NT WING―バベルシティ・グレイス―』の販促イベント。ゴスロリテイストがベースの衣装に、メンバー全員でアレンジを加えたアンティーカのステージ衣装――シンフォニックスチームを身にまとったステージに立つ五人。特徴的なのは、大きさと取りつける場所がメンバー毎に異なっている金色の歯車。

「――やけん今、うちはここで宣言するばい!! アンティーカは必ず『W.I.N.G.』に出場する!! そいでうちらアンティーカが優勝ばいいただくけんね!!」

アンティーカというユニットの自己紹介から始まったメンバーの



トークが終わり、リーダーの恋鐘さんが、明日から始まる『W. I. N. G.』出場をかけた戦いに向けての決意表明を声高らかに宣言する。隣にいる灯織は、それを聞いて思うところがあるのか真剣な眼差しを向けていた。

その後、ステージ上にて、五人がそれぞれの定位置につくと曲のイントロが流れ始める。

バベルシテイ・グレイスは、退廃的で幻想感あふれる歌詞が紡ぎ出すシンフォニックメタル。『運命の鍵』『永久機関』と言った、新世界革命的ユニットのコンセプトともマッチしたフレーズを、五人が熱く歌い上げる。

「……………」

そして自分も、アンティーカーと言う目の前のアイドルに心奪われる。

アイドルとしての歌唱力やダンスの技術は、巢立ちしていない雛鳥のようにまだまだだと思う。今の自分に深く突き刺さるほどの五人の魅力、それは――

「(みんな、楽しそう……………だな)」

今この瞬間が、楽しくてたまらないという各メンバーの感情が、観ているこちら側にまで伝わるからだ。五人全員がそう思っている分、観客席にも五人のリンクした思いが鳴り響く。

自分自身が『好き』や『楽しい』と言った気持ちで物事に取り組むことができ、なおかつそれを観ている人たちにまで感染させる。そこに歌やダンスと言ったアイドルとしての技術を向上させ実力も伴えば、人気アイドルになれる……………かもしれない。

「(……………バスケが大好きだった頃は、俺も――)」

舞台上でキラキラ輝く五人の雰囲気触発され、自身の楽しかった頃の記憶が一瞬間によぎるも、すぐにそれを振り払いソロパートを歌う摩美々を見つめる。

疾走感のある激しい音楽に合わせたステップを踏み、熱さを胸の内に秘めてクールに歌い上げる。その姿からは、普段のやる気のなさなんて微塵も感じさせない。

そしていつもと違う摩美々を見たことで、先程まで考えていたバスケの記憶が上書きされる。今は自分のことより、摩美々を応援してやらないとな。

あの時、自分の大好きなバスケじゃなく、大好きな幼馴染みを選んだことに後悔はない。ステージ上の、今の摩美々を見て、はつきりと思える。

「だから——」

扉は錆びついたままでいい、それを回す運命の鍵も必要ないんだ。

## トリツキーナイト

「はーい！ それじゃあ摩美々ちゃんのデビューライブ成功を祝して、乾杯〜」

「乾杯」

「かんぱーい」

おっとりとした口調のせいでも、どこことなく締まらない乾杯の音頭をとる母さん。

リビングのテーブル上には、摩美々の好物料理を中心に、メインからデザートまで所狭しと並んでいる。何も知らない人が見たら誰かの誕生日だと思われるそうだ……。

そんな、少し胸焼けしそうな光景から本日のMVPに視線を移す。ステージ上で発していたクールな雰囲気は既に霧散し、今は自分の目の前に置かれたチョコレートパフェのクリーム部分を人差し指ですくい口へと運んでいる。

その人差し指のクリームを舐めとり、リップ音と共に指を離れた瞬間、目と目が合う。

俺の視線に気づいた摩美々は蠱惑的な笑みをこちらに向けながら、今度はゆつくりと、見せつけるように人差し指を唇まで持つていき、口の中を含む。……………エロい。

「指でクリームをすくわない、スプーンを使いなさい」

頭の中の煩惱を払い、いつも通り冷静に行儀の悪さを指摘してスプーンを手渡す。

「……………なんだかあ、息子さんの視線がいやらしいんですケドー」

「あらあ、それはそおよお。このコは昔からずくずくと摩美々ちゃんが好きで、そんな妄想ばかりしてたんだから〜」

「母さん!!」

落ち着いていた態度はものの数秒で崩され、恥ずかしさと若干の怒りを交ぜた感情を自分の母親にぶつける。毎日ニコニコと笑顔を振りまき、のほほんとしている母親だがこれは明らかに確信犯だ。

「なによ、本当のことじゃないの。今もたまたまに自分の部屋で摩

美々ちゃんの名前を呼んで何かしてるでしょ〜?」

「ふふー、まみみ、その話を詳しく聞きたいですねー」

面白いおもちゃを見つけた子供のように、いたずらっぽく笑いながら俺のこを見つめてくる鬼と悪魔。しかも何かの内容を分かっている、あえてそのナニかをしていた本人に訊かないだろう普通!!

摩美々は言わずもがな、母さんもおっとりしているように見えて内心は結構腹黒い一面を持っているからタチが悪い。そして二人が協力して調子に乗った時は、俺に再起不能のダメージを与えようとしてくるため最悪の一言に尽きる。

「リヨウちゃん♪」

「良介ー」

満面の笑みで早く続きを話せと威圧されるが、母親と恋人の前で自分のナニの話なんて出来るかっ!!思春期の男子高校生なんだから、もっとデリケートに扱え!!

「そ、それよりも母さん、ライブがどんな感じだったか聞きたがっていたよね?! まず摩美々は——」

このままだと精神がオーバーキルされると判断し、今日行われたリイベの話題を食い気味に話し始める。母さんはリリイベ——と言うより摩美々の活躍に興味があったため、不自然な話題の切り替えにも突っ込んでこなかった。

追撃しない母さんを見て、摩美々は少し不服そうな表情を見せながらもそれに従う。

開始直後の自己紹介を交えたメンバートーク、『W・I・N・G』に対する決意表明、ライブで熱唱したバベルシティ・グレイスなど一通りのことを話した。

話している最中、摩美々が活躍した内容が出るとその度に、活躍した本人を抱きしめながら嬉しそうにしたり、褒めちぎったりする様子は、まるで実の娘に対して接しているよう。実際、うちの母親のことを摩美々は『ママさん』と呼ぶしな。

摩美々本人も、嫌がったりする素振りを見せることなく、されるがままに受け入れている。さすがにちよつと暑苦しそうな雰囲気は出

しているけれど……

そして会話も一区切りついたところで、ホクホク顔になった母さんが少し疲れた様子の摩美々を連れてお風呂へと向かって行った。行く前に『覗いちやダメよ』とか言われて二人にいじられたが、軽く聞き流した。

さて、俺はその間に食事の後片付けでもしておこう。

\*\*\*

「は〜い、これでおしまあい。ぬるつきが残ってたり、いつもと違うところがあれば遠慮せずに言ってね〜、摩美々ちゃん」

「ん〜……大丈夫です〜」

良介のママさんがトリートメントしてくれた髪に触れると、スルスルと指通りのいい感触が手に馴染む。毎日ヘアケアしている私と同じくらいまいのはどうしてだろうと、いつも不思議に思う。奇抜な髪色だから、自分じゃないと難しいはずなのに……。

美容師でもなければ、それに近い経験をしているわけでもない。そもそも私とママさんは髪質が違うから手入れの方法も異なるし、普通はわからないはず……前にそのことを興味本位で訊いてみたら――

『そんなの摩美々ちゃんを愛してるからに決まってるじゃない〜』

嘘じゃないのはすぐにわかった。私のためにわざわざケアする方法を調べて練習したらしい。正直で純粋な、その気持ちを向けられて、私は恥ずかしくなつて……素っ気ない反応をした。

両親が愛してくれないわけじゃない。

プレゼントはいつももらっているし、叱られたり、否定されたりすることもない。

だから、今日のライブで一番観に来てほしいと思っていた人たちが

いなくても――

「(私は……憂鬱なんかじゃない)」

「え〜いっ♪」

背中にママさんが抱きつき、私以上の大きなふくらみが押し付けられる。

大変なことも多いって聞くけど、やっぱりちよつと憧れる。三峰と私の視線が、ダンスしている恋鐘に向いてしまったことが記憶に新しい。

「あのー……暑いんですケド」

「もお〜、いつもと違うところがあれば遠慮せずに言っしてほしいの……隠し事する悪い子は、このまま放さないわあ〜」

「問題ないですよー、まみみがケアした時と同じ感じですよー」

「うふふ、ママさんうれしく。それじゃあ髪以外も含めて大丈夫なのねー」

最後にさり気なく確認を取ってくるあたり、気づかれていると思う。

私の表情は見えていないはずなのに、普段はのほほんとしているのに、こうして鋭い時がある。でも私は悪い子だから、簡単に答えはつかませない。

「はいー、今の私には赤色と青色がありますからあ」

「あら？ 摩美々ちゃんの色は紫よあ〜」

赤は温かさと愛情を、青は信頼と落ち着きを与えてくれる。

二つの色を混ぜることで、私という紫色が出来上がる。

パパやママにとって私の色が透明でも、二人の色が近くにある限り、私は、私だけの色になれる。透明な自分に、色をつけることが出来る。

「ふふー」

「あらあら、このまま誤魔化そうとしてもそうはいかないわよ、えいっ♪」

「きゃっ——」

赤よりも青く、青よりも赤く

誰にも捕まらない、複雑な、パープルに——

\*\*\*\*\*

「——はい、アイドル活動は順調みたいです。仲間にも恵まれていて、今日のライブも楽しそうに歌っていましたから。……まあ本人はあまのじゃくなので、否定してましたけど」

お風呂上りの火照った体に、外気の冷たさが心地いい自宅の庭先で、通話中の人物に今日のリリースイベントの内容をかいつまんで伝える。摩美々関連の話題を挙げると、嬉しそうにしつつも、どこか素直に喜べていないことを感じさせる歯切れの悪い返事。

そして一通り話を聞いたあとに発せられたのは謝罪の言葉で、電話越しながら、頭を下げている様子が伝わってくるほどの声色だった。摩美々の初ライブなんだし、やっぱり行ききたかったんだろうな……。 「そんな、謝らないでください。むしろ謝るのは自分の方なんですから……本当に、無理を言ってしまったてすみませんでした」

もともと二人の仕事が忙しいのを承知した上で、俺が無理矢理ライブの予定を組み込んだようなものなのだから、相手側は何一つ悪くない。だと言うのに、仕事を休んでも来てほしかったなんて考えが浮かぶのは、まだまだ自分が子供だと言う証拠……。なのかな……。？

「いえいえ、わざわざ連絡までして下さってありがとうございます。……おばさんもお体に気をつけてお仕事頑張ってください」

最後におやすみなさいと言い、電話を切る。少し冷えてしまった体を温めるため家の中に入ると、考えごとをしながら、自室に向かう階段をゆっくりのぼっていく。

摩美々とその両親、おじさんとおばさんの仲は悪いわけじゃない……と思う。長年お隣さんとして付き合ってきたこともあり、家庭環境もある程度は知っている。

「(たとえ時間があったとしても、どこか行きづらい部分があるのかな……?)」

階段をのぼり終わると同時に、ため息をつく。

今はこれ以上考えても仕方がない。頭の中でぐるぐると巡っていた思考を、大きな息と共に吐き出す。……眠れなくなるのも困るし。

「あ、遅かったですねー」

自室のドアを開くと、先ほどまで通話していたおばさんの娘が、俺のベットに腰かけてスマホをいじっていた。とりあえず寝る時は出て行ってもらおうとして、俺にとつて一番の問題は摩美々の格好。

白を基調とした生地に、スノードット柄の可愛いデザインが散りばめられている、ベビードール風のルームワンピース。ゴシック調の摩美々が好きそうなデザインのレース部分に関しては、おそらく自分でアレンジしたんだろう。それにしても肌が見えすぎじゃないのか、これは……。

この子が持っているナイトウェアは、どこかなまめかしい部分のある物が多いから、目のやり場に困る。実際、今着ている物だって、大きく開いた胸元とか、下着が見えるか見えないかギリギリのラインまでしか伸びていない衣服の丈とか……ちゃんとショーツを穿いているのかさえ怪しい。

「……………」

「なっ、なんだ?! 言っておくが俺はそんな目でじろじろと見ていないからな!」

訝しげな眼差しで、こちらをじつと見つめている摩美々に気圧され、自分でもよくわからないうちに言い訳を発してしまう。というか今の発言、下心を持って見ていましたと告白してるようなものだろう! 「いくらファッションセンスがない良介でもお、それはないと思うんですケド」

「へ……? あ、ああ、パジャマのことか」



摩美々が呆れている理由に気づいて少しホツとする。そうか、今着ているお面ライダーのパジャマをずっと凝視していたんだな。母さんが面白がって買ってきた物だけれど、おかげで助かった……ありがとう、母さん！

いやらしく見ていたなんてことがバレれば、からかわれおもちやにされることは確実。

彼氏としては、やっぱり摩美々をカツコよく引っ張っていけるような男で――

「まみみの下着が気になるんですかあ？」

あたりがかったけれど、もう無理と言うことが確定した。

『ふふー』と、いつもの笑い声を出して、俺のことを面白おかしく観察している。

「……なりません。それより年頃の女の子がそういう格好をするのは、いただけないな」

これ以上、摩美々に隙を与えず、自身も墓穴を掘らないためにまずは冷静になろう。

……よし。とりあえず続きは、男の前でその格好は危ないとそれっぽく注意、うまくごまかして話を逸らすところまでもっていければ……！

「今日穿いてるショーツは、結構お気に入りの――」

「まてまてまてっ！　なんで裾つかんで見せようとしてるんだ！」

素早く摩美々の目の前に移動した俺は、めくろうとしていた方の腕を押しさえる。

「えー、だって気にならないんでしょー。ならいいじゃないですかあ」  
そう言うともう片方の手で裾をつかみ、見せつけるようにして上へと持ち上げた。

俺は摩美々のペースに飲まれまいと、自分の両手で顔全体を覆い抵抗を試みる。

「いいから早く裾から手を離しなさいー！」

「ふふふー、はあい」

摩美々の悪戯っぽい返事のあと、両手で勢いよく背中を押され目の

前にあるベットのの上に倒れる。いきなりのことで少し驚いたが、どうせまたいつもの悪戯だと思い、とりあえず叱つてやろうと起き上がった瞬間、今度は俺の体めがけて摩美々が飛び込んでくる。

少しうめき声を出しつつも、無事摩美々を抱きとめる。

飛び込んで来た本人は、胸元辺りに顔をうずめ悪戯が成功しておもしろがる小悪魔のように、上機嫌で楽しそうな表情。

「ふふー、良介ゲッター」

「こ、こらっ！ 早くどきなさい！」

この前の制服姿で結構やばかったのに、今回の摩美々はさすがにマズい！

密着されていることに加え薄着な分、その押しつけられたスタイルの良さがひしひしと伝わってくる。

とにかく、理性がゴリゴリ削られていく前に、別のことを考えて気を紛らわせ――

「ちなみに今のまみみは下着をつけていないのでー」

「なんで今それを報告するんだ!!」

そんな爆弾発言されたら余計意識することになるだろうが！

俺の理性と言う名のメンタルを急速に減少させていく中、当の本人はその様子を見て愉悦でも感じているのか、すごく満足気だ。

「というかー、別に恋人なんだしこれくらいフツーでしょー」

「俺の理性がヤバいの！ とにかく、まだ責任をとれるだけの能力もない学生なんだから、間違いを起こすのは駄目ですっ！」

「相変わらずマジメですねー。でもまみみとしては、ここで既成事実の一つや二つ作っておきたいんですよー(ライバルとか出てこられてもメンドーですし、それに灯織とか、怪しいし……………」

先ほど以上の爆弾発言をする恋人。俺だつて将来的に摩美々と結婚する以外ありえないから死んでも責任はとるけれど、でも今はアイドル活動や『W. I. N. G.』だつてある…………だから心を鬼にして煩惱を叩き潰す！

「――なんて言つても、ヘタレ良介には無理なんで期待してませんケド。そもそも冗談ですしー」

「…………お、お前なあー！」

「なので、約束してくれたらどいてあげます。私が『W. I. N. G.』で優勝することが出来たら…………私の言うこと、聞いてくれますか？」  
いつもの間延びした口調が一切感じられないほどの、真剣な声色。

それを聞いた俺は、理性が、煩惱が、と言ったことだけでなく、摩美々に抱きつかれていることすら忘れていた。

正直、摩美々が優勝を目標として口にするなんて思わなかった。

同じユニットの仲間であるアンティーカのためか、それともなにか別の目的のためなのかは分からないけど、こんなの…………答えなんて最初から決まっている。

「俺も、優勝させるために全力で摩美々を支えるし、手助けする。だから一緒に頑張ろう。それとお願いだったら、いつでも、どんなことでも聞いてやるぞ？ か、彼氏なんだしさ…………」

カッコよく決めようと思った矢先、恥ずかしがって最後の言葉をスムーズに言い切れずどもる。

…………羞恥心のせいで、摩美々の顔を見ているのがつらいから早く顔を背けたい…………。

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、真剣な表情から悪戯っ子へと変わると、普段の調子で『ふふー』と笑って――

「んんっ?!」

唐突に顔を近づけてきた摩美々に、唇を奪われる。

そしてそのまま口内に侵入してきた恋人の舌は、ゆっくりと探るように動き回る。こういうようにしてうまく舌先を使い、自分の舌や歯茎などの口内の敏感な部分を吸われ、舐められる。

やがて満足したであろう摩美々が『ん…はあ…………』と言う、艶っぽい声を漏らしながら口を離す。クリアになった視界に映るのは、顔を赤くしてニヤつく恋人と二人の間を伝う銀色の糸。

「ふふふー、ごちそーさまでしたあ」

「……………お、お」

「摩美々ーっーっっ!!」

悪い子とバツクダンサー

「おはよーごいまあす」

「おつはよーまみみん。でも残念ながらちよいアウト、あと少し早ければ回避できたんだけどね」

摩美々を追いかけけるようにして事務所の中に入ると、先に到着して俺たちを待っていた摩美々以外のアンティーカーメンバー。集合時刻に間に合わなかった理由はちゃんとあるのだが、遅刻してしまったことは事実なので、四人に遅くなってしまったことを謝罪する。

「フフ、良介が謝ることなど何もないさ。その状況を見る限り、プロデューサーを助けたから遅れたんだらう？ だから悪く思う必要もない、もちろん摩美々もね」

「私は最初から悪いと思ってないんですケド」

「あ、あの……プロデューサーさん……大丈夫、かな？」

「気持ちよさそうに眠つとーばつてん、どがんしたと？」

俺の肩に寄りかかり熟睡するプロデューサーさんを見て、霧子と恋鐘さんが心配と疑問の声を上げる。ここ最近、休みを取らずに忙しく動き回っていたため、疲れが抜けていないらしい。

事務所に向かう途中、くたびれた様子で額に冷却シートを貼ったプロデューサーさんを見かけた時、声をかけて正解だった。何度もあくびをして眠そうに目をこすりながら『……良介君、肩を貸してもらっても、いいかな……？』と言われて、すぐに眠り始めたのはびっくりしたけれど。

「んん……ここは、事務所か……？」

あとではづきさんにプロデューサーさんの負担を減らすことが出来ないか相談しよう、とりあえず明日は絶対休ませようといったことを考えていると、プロデューサーさんが目を覚ます。ぼんやりした様子で辺りを見回して、今居る場所を確認するとその場で大きく伸びをする。

「やあ、お目覚めのようだね、プロデューサー。随分お疲れ気味のようだけれど、大丈夫なのかい？」

「はは……少し仕事を詰め込み過ぎたせいかな疲れが中々抜けなくてな。時間に遅れてしまつて本当に申し訳ない」

謝るプロデューサーさんに対し、本人の身体の心配をするメンバー。

少し睡眠をとつたことで、先ほどより顔色が良くなったプロデューサーさんは、体調に大きな問題がないことを伝え、みなを安堵させる。「プロデューサーさんが少しでも回復したのなら良かったです。とりあえずみんなの分の飲み物を用意しますが、希望はありますか？」

「あ……わたしも、手伝います……！」

「フフ、それじゃあ三人で、ここにいらっしゃるみんなに極上の一杯をお届けしようか」

これから行うメンバーミーティング前のドリンクを用意するため、一緒に準備してくれることを申し出た霧子、咲耶と共にダイニングキッチンへと向かう。

ちなみに各自の飲み物は、自分たち三人がアイスコーヒー、結華さんと恋鐘さんは果汁100%のジュース、摩美々はメロンソーダで、上にソフトクリームが乗つたものという注文だったが、当然そんなレストランのようなサービスはないので、ソフトクリームは乗っていない。

「(あとはプロデューサーさんの飲み物を……えっと、リカバリソーダMAXは……赤色の缶だったな)」

事務所のみんなが共用で使用している冷蔵庫とは別に、青・緑・赤色の缶に雷マークのみが描かれたシンプルなデザインの新ジュース。リカバリソーダと呼ばれるそれは、プロデューサー必須の飲み物らしく、他事務所ではスパークドリンクやスタミナドリンクとも呼ばれるらしい。

「お、りょうたんおかえり〜」

「ありがとう、良介君」

プロデューサーさんにリカバリソーダMAXを手渡し、各自飲み

物が行き渡ると『W. I. N. G.』出場に向けて、アンティーカーメンバー一人一人の方向性とそれに合った仕事内容について確認しながらの話し合いを始める。

「まず各個人の、シーズナーの方向性については以前伝えた通りの内容でいこうと思う。リリースイベントの内容を見る限り、アンティーカーのファン層についても大体予想していた通りだったしな」

コミュニケーション能力と軽快なトーク力を持つ結華さんは、ラジオ番組やトークショーと言った会話をメインとしたラジドル路線。765プロ所属の松田亜利沙がラジオパーソナリティを務める番組に、週替わりの相手として出演することが決定している。

リーダーの恋鐘さんは、溢れ出るほどの元気と自信を武器に、企業の商品を魅力的に紹介するキャンペーンガールや、一工夫することで美味しくなるアイデアを、料理番組の担当コーナーで発信したりと、どこか人を引きつける恋鐘さんの良さを活かした仕事中心。

モデル経験者の咲耶は、電車や女性誌の広告スペースに載るような、商品の魅力を伝えることが重要視される広告撮影など、前職の強みを利用した活動内容。

霧子と摩美々に関しては、アイドルの仕事よりレッスン中心のスケジュールになっている。これは、二人が他のメンバーより劣っていると言うわけではなく、むしろ長所を伸ばすために行うらしい。

実際にリリース時の、霧子が歌うソロパートはその透き通る綺麗な歌声が会場全体に響き渡ることで、思いきり目立ちながら観客を魅了していた。

摩美々のソロは霧子ほどではないにせよ、充分上手いと感じられるレベル。加えてダンスとビジュアルの二点も高水準でまとまっている。

「——とまあ、こんな感じで進めていこうと考えている。なにか意見や、疑問点があれば遠慮なく言ってくれ」

「んふふ、ええね、プロデューサー！これならうちの実力を存分に発揮できるばい！」

「なるほど、こんな風に私のモデル経験を有効活用するなんて……さ

すがだね、プロデューサー。私もアナタの期待に応えられるよう、頑張るよ」

「三峰も異論なし、って言いたいところなんだけどさー」

「うん……その、摩美々ちゃんの内容……」

結華さんと霧子が、シーズン1における摩美々の活動について、他四人と比べスケジュールに空きが多いのではないかと疑問を呈する。同じレツスン中心スケジュールの霧子と比べても、半分以上も予定差があるため、おかしいことは間違いない。

やっぱり『彼氏持ち』と言う点が足を引く張つているとか……？そんなネガティブ思考に陥るも、以前プロデューサーから聞いた話を思い出し、ありえないとぼつさり切り捨てる。

今現在の、アイドルとしての摩美々は、咲耶と同じくらい女性ファンが多い。

元々、同性に好かれやすいという点に加え、摩美々のいろいろな私服を見た女の子たちがこぞって参考にしたり、真似をするほど尊敬されるファッションセンスが大きくなった。

彼氏がいるという部分も、若い子を中心に好意的に捉えられているらしく『あれだけ綺麗なのに、いない方がおかしい』と、逆に納得する子の方が多いほど。

当然ながら彼氏がイケメンであるという、前提条件ありきになるけれども……。

「ああ、その理由はもちろんある。摩美々には少し大きめの仕事を予定しているんだが……本人が断る場合も考えて、あえて何も書いてないんだ。受ける受けないを決めてもらってから、改めてスケジュールを調整しようと思う」

「ふふー、メンドーなら断つてもいいなんて、プロデューサーは優しいですねー」

「よかわけなかやろー！ どがん仕事も全力でやらんば審査に落ちてW・I・N・G.』に出場できんばいー」

「恋鐘の言う通り、面倒だから休みたいなんてのは当然ダメだぞ」

「……しかし、受ける受けないを選べるというのは、新人アイドルに



とってそれだけ難しい仕事なのかい？」

「ああ、摩美々にはとあるアイドルのバックダンサーをやってもらおうと思っている。まずはこのライブ映像を観てくれ、摩美々が踊る課題曲とそのアイドルが映っているから」

そう言うのと、手に持ったDVDを再生機に入れるプロデューサーさん。

テーブルに置かれた空ケースのメモ欄には『七彩メモリーズ・摩美々用』と記載されていた。

映像が始まると同時に、薄暗い青色を基調とした照明がステージを照らし、それまでベールに包まれていたアイドルの存在がはつきりと映し出される。

少し日焼けした健康的な小麦肌と、ふわっとした美しい黒髪ロングヘアを、お洒落なりボンでポニーテールに結び上げた姿が馴染み深い、沖縄出身のキャンピキアイドル——我那覇響。

大きめの仕事、それも参考映像に、人気アイドル以上でなければ出場することすらできない『七彩メモリーズ』とくれば、当然世間でも認知度のある人物だと思っていた。

摩美々は、283プロ所属前に俺と行った、765PRO ALL STARSのライブで我那覇響のことを見ているから、ある程度は知っているだろう。

短めのイントロのあと、第一声から力強いボーカルでスタートを切る。

歌っている曲は、普段の天真爛漫な彼女とは打って変わり、奥底に隠されたクールな一面を打ち出した曲調の持ち歌『Rebellion』。

反逆や反乱、反抗、そんな意味を持つRebellion。アンティーカーのバベルシティ・グレイスと同じくクール系の、疾走感のある楽曲。そこに自身の、トップクラスの實力を誇るダンスが加わることにより、観ている者すべてを完全に引き込むパフォーマンスへと昇華される。

「……………すい……………」

ライブ映像に心奪われているさなか、ふと自分の心の中で漏れた感想。

この我那覇響のダンスに関しては、今まで自分が見てきたアイドルと比べて、本当に次元が違う。

踊りに詳しくない素人でも、すぐに分かるRebellionのダンスの難しさ。

曲のBGMに合わせ速度を落として片脚を軽やかに上げたり、ターンのあとゆっくり目のステップで歩き出したかと思えば、突然始まる妖艶な振り付けなど、大胆な動きよりキレのある緩急の動きが要求される。映像の中の人気アイドルは、どの動きもミスすることなく完璧にこなしていた。

そして曲は2番サビ、このパートは我那覇響のRebellionが大いに盛り上がる部分。

『——赤——』

そのワンフリーズと共に、浅葱色のコンサートライトの海を一瞬で赤く染め上げる。

ファンが舞台装置となり、アイドルの歌に応える一体感は凄まじく、勢いそのまま最後まで歌い切ると大歓声が沸き起こった。

会場の興奮は冷めやらぬまま、他の人気アイドルたちがステージ上で横一列に並ぶと、大型スクリーンに各アイドルの顔写真と、色の付いていない星マークが表示される。このライブバトルの結果発表へと移るらしい。

ボーカル、ダンス、ビジュアル、各審査員一人当たりの持ち点は20点で、合計点の多いアイドルが優勝のシンプルなルール。

「うーん、みんなビシッとキマってたが、今回優勝したのは——」

三人の内、ダンス審査員が代表して第一位の人物を発表する。

当然ながら優勝したのは、765プロ所属の我那覇響。ボーカル11、ビジュアル13、ダンスに至っては17と言う数字を叩きだし、合計点は41点。アイドルの数が六人なので、たった一人で七割近くの

点数を獲得していることになる。

ライブ映像が終わると、プロデューサーさん以外の、俺を含めた全員の空気が少し重くなる。……いや、俺で少し重い程度なら、同じアイドルであるアンティーカーの面々はもつと重いのだろう。ここまで人の心を、まるで掌握しているかのように自分自身に引き込ませるパフォーマンスを魅せつけられたら……——

「よーし！　うちらアンティーカーも同じアイドルとして負けてられんね！」

プレッシャーを感じる……そんな自分の考えを吹き飛ばすように快活な声を上げたのはリーダーの恋鐘さん。どうやら俯いていた理由は、圧倒的な実力差を見たことでへこんだり、変に気負ったりしていたわけではないらしい。

「いや……それはそうなんだけどさあ……」

「……正直、圧倒されてしまったよ。私は同じアイドルとして、あんな風に観ている人を喜ばすことができる存在に、果たしてなれるのだろうか……」

「なくに、弱気なこと言いよーと！　確かに今見たアイドルはすごかったばってん、いずれアンティーカーもあがんライブが出来るようになる、とにかく今は練習あるのみばい！」

落ち込む結華さんと咲耶に、自信満々な表情で答えるアンティーカーのリーダー。

それは強がりや虚勢なんかじゃない、自分が、自分たちが、我那覇響のような人気アイドルになれることを信じ切っている目だった。

「う、うん……！　練習しないと……今より、上手になれないし……」

「みんなガンバレー」

「そうそう……って、摩美々も頑張らんばだめやろ！　うちらは五人揃うて最強ばい！」

どんな強いアイドルが相手でも望むところ！そんな恋鐘さんの雰囲気にあてられ、意気消沈していたメンバーの表情が、徐々に笑顔へと変化していく。

プロデューサーさんが、恋鐘さんをオーディションで合格にした一

番の理由『どこか人を引きつけるような魅力がある』と言っていたけれど、少しわかったような気がする。

「こんな映像を見せられて気圧される気持ちもわかるが、恋鐘の言うとおり、今は練習あるのみだ。アンティーカーの五人なら、さっきの我那覇響のようなパーフェクトライブが出来るようになるって、信じてるからな！」

「……フフ、私としたことが、少し弱気になっていたようだ。こんなことではフアンみんなを笑顔にするどころか、曇らせてしまう」

「三峰たちと人気アイドルじゃレベル差あつて当然だよなー。序盤は地道に経験値をためて、レベルアップしていくのが王道かく」

「まだまだ低レベルの新人に、こんな難しいことをやらせようとするプロデューサーは意地悪ですなー」

「いや、俺もプロデューサーとして、よく考えた上で摩美々ならできるとも……ん？　もしかして引き受けてくれるのか？」

「引き受けるも何も、プロデューサーが持ってきたお仕事じゃないですかあ。まあ出来る出来ないはあると思うのでー、一回通しで踊ってみないことにはなんとも言えませんケドー」

多少やる気になった摩美々を逃すまいと、喜々とした表情でこのあとの予定を話しだすプロデューサーさん。午後からレッスンの予定が入っていた恋鐘さん、結華さん、咲耶の三人はそのままトレーナーさんが待つレッスンスタジオへ。

摩美々は、事務所のみんなが自主練習を行う場所として使っている大部屋で、ライブ映像を観ながらダンスの練習。自主レッスンがしたいと言う霧子も、同じ部屋で練習することになった。

\*\*\*\*\*

「♪ねーむれー、ねーむれー……」

目の前で発せられる、優しく甘い霧子の歌声は、聴いているこちら

を心地よい状態に自然と導いてくれる。少し離れたところでプロデューサーさんと摩美々が、ダンス練習をしているというのに、霧子が子守歌を歌うこの空間だけが、まるで切り離されたかのように静まり返っている——そんな感覚に陥る。

「……ねーむれー、はーはーの、てー…にー…♪」

夢心地気分から現実には引き戻されはじめたのは、終わりのワンフレーズ部分。

安定していた声量が徐々に乱れ、最後の方はささやくだけで通らない声になってしまっていた。

ロングトーンを意識しながら、息が吐けなくなる寸前まで声を伸ばし、そのあと少しづつ息漏れさせていく、ウイスパーボイスと呼ばれる発声方法の練習をしている霧子。

少し疲れ、集中力も切れている様子を見た俺は、霧子に飲み物を手渡し休憩を提案する。

「あ……ご、ごめんなさい……。せつかく……。練習に付き合ってもらっているのに……。その、うまく……。できなくて……」

「気にしないで大丈夫。自分も摩美々のお目付け役として来たはいいけど、ちゃんとやってくれるから、正直暇していたところだしね」

ボーカルトレーナーさんが、霧子の、聴いている人を夢見心地にさせる綺麗な歌声を武器とするため、ウイスパーボイスを身につけさせようと練習メニューを組んでいるらしく、本人も空き時間はこうして自主的にレッスンを行うようにしているそう。

ウイスパーボイスを自由自在にコントロールすることができれば、柔らかく優しい表現から切なく儂い表現まで、その感情が歌を通してよりダイレクトに伝えられるため、歌い手として大きな武器になることは確かだろうと、プロデューサーさんも話していた。

「と言うより、これでうまくできてないの？ 充分うまいと思うけれど……」

「えっと……。今のままだと、息が強くて……。マイクを持って歌った時、雑音が入るから……」

歌のことをよくわかっていない素人が見てもうまいのにまだま

だって……いや、でもスポーツだって、その競技をやらない人から見てうまいと思っても、やっている人からしたら大したことないなんてよくあるしな……。

「その、わたしがメンバーのみんなの……足を引っ張らないようにしないと、いけないし……」

「その点は大丈夫じゃないかな？ アンティーカーの中にそんなことを思っている人はいないだろうし……もう少し自信を持ってみていいと思うよ」

「でも……自分に自信を持つようなことって、全然、なくって……」

「うーん……それなら、他人が具体例を挙げることで、自信が持てる部分を自覚する——なんていうのはどうかな？ 例えば、霧子のすごく心配性なところは、自分より人のことを第一に考えている証拠で、それは他の人の気持ちを理解できているからこそだよ」

「そう……でしょうか……？」

「まあすぐに信じるのは難しいだろうけど、霧子のその気遣いとか思いやりは、必ず誰かが見ているし、いずれ多くの人がそれに気づく、その時なら信じられるんじゃないかな？」

「……いっ……心配し過ぎ、気にし過ぎは……よく言われるけど……そんなふうになってもらえたのは、初めてです……。良介さん……ありがとう、ございます」

「はは、どういたしまし——てっ?!」

言葉を言い切る前に、眼前まで迫っていた缶ジュースをなんとか掴み取る。

投げつけてきた犯人であろう人物に視線を向けると『ふふ』という、毎度おなじみの笑い声。プロデューサーさんと摩美々も休憩に入ったようだ。

「良介だけ飲み物がないのでー、優しい彼女からプレゼントですよー」  
本当に優しいなら手渡しで来てほしいんだけどな……そんなことを心の中で愚痴りながら、受け取ったジュースを開けるためプルタブに手をかける。

「待った！ まだ開けるのは——」

慌てたように言うプロデューサーさんの声が聞こえたが、時すでに遅し。

炭酸特有の開ける音に溢れ出る液体の音が混ざったブシュ！という効果音を発しながら、床と自分の手を汚していく透明色の飲み物、たぶんサイダーだろう。

「だ、大丈夫ですか……！」

近くに置いていたタオルで手と腕周りについたサイダーを拭き取る。

床の方は、俺がやる前に霧子が進んで掃除してくれていた。さて、とりあえず休憩時間中はお説教確定だな……。

「今そつちに行くからそこを動くんじゃないぞ、摩美々」

「ふふー、良介がきたら助けてくださいねー、プロデューサー」

「炭酸を振った摩美々が悪い、おとなしく良介君に怒られなさい」